教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 看護学科　　資格： 教授　　氏名： 徳重　あつ子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	寝たきり予防，認知症予防，高齢者の健康の維持・増進
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科　博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会交流集会主催	2018年03月17日	臨床現場における認知症ケアの質向上： 認知症高齢者のケアの質を上げるための取り組みについて、提言と討論を行なった。 徳重 あつ子、横島 啓子、荒木 大治、岩﨑 幸恵、杉浦 圭子、梅澤 路絵、浅田 知子、岩見 明子、大越 幸代、大納 英美、源野 幸世、前田 景子、宮地 由紀子
2.サンケイリビング「ミセスの一日大学生：目指せ！アクティブエイジング」講師	2018年03月15日	
3.ひらかた市民大学（市内６大学連携講座）講師 テーマ「アクティブエイジング看護講座　～回想法と コグニサイズで大脳を活性化させよう！～」	2015年11月28日	
4.国家公務員共済組合連合会　枚方公済病院　研究指導	2014年04月01日～2015年03月31日	
5.京都府看護教員養成講習会　在宅看護論演習　講師	2010年08月	
6.京都府訪問看護ステーション協議会　研究指導	2010年04月01日～2014年03月31日	
7.明治国際医療大学看護学部　リカレント学習講座フォローアップ研修講師	2009年11月	
8.独立行政法人国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校　「看護研究」講師	2007年04月01日～2009年03月31日	
4 その他		
1.リラクセーション看護法指導者　レベル1、2、3修了認定	2014年03月	

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.養護教諭一種免許	2010年12月1日	
2.2級カラーコーディネーター	2010年06月20日	
3.保健師免許	2004年04月19日	
4.2級福祉住環境コーディネーター	2000年11月5日	
5.介護支援専門員	1999年03月17日	
6.看護婦免許	1989年4月28日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.京都市介護認定審査会委員	1999年11月01日～2001年3月31日	
2.京都市要介護認定訪問調査員	1999年11月01日2001年06月30日	
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所、発表雑誌等	概要

共著書別	発表の年月	又は学会等の名称

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.触れる・癒やす・あいだをつなぐ手 －TE-ARTE学入門－	共	2011年10月	看護の科学社	看護で活用できる補完代替療法についてまとめたものである。 本人担当部分：第2部TE-ARTEの価値の第3章「TE-ARTEと補完代替療法（CAM/CAT)の変遷と課題」を担当した。そのうち「CAM/CATにおける世界の歴史」（p.73-84)、「看護におけるCAM/CATの課題への取り組み」（p.93-100)は単著である。 編集：川島みどり 共著者名：川島みどり、小板橋喜久代、尾崎フサ子、小山敦代、 徳重あつ子 、五十嵐稔子、山口創、木本明恵、八塚美樹、平松則子、大宮裕子、向野義人、守田美奈子、グライナー智恵子
2.地域看護と地区診断 －保健師のあゆみをふまえて－	共	2010年03月	窓映社	地区診断の実際について、実例を踏まえながらまとめたものである。 本人担当部分：第3章 3-5、「個人、家族への支援と地区診断　～在宅看護への活用～対象別の社会資源の活用」 高齢者（特に虐待のある者）、障害者における社会資源の活用方法について述べた。（p.75-78単著） 編集：桝本妙子、福本惠 共著者名：植村小夜子、大籠広恵、田中小百合、 徳重あつ子 、福本惠、堀井節子、桝本妙子、三橋美和
2 学位論文				
1.脳波α・β帯域のパワー値からみた大脳を活性化させる看護ケアとしての坐位姿勢援助の検証　（博士学位論文）	単	2009年03月	大阪大学大学院	本研究の目的は、仰臥位から坐位への姿勢変化が大脳を活性化させるかどうかを脳波を用いて測定し、看護ケアとしての坐位姿勢援助の検証を行うことである。研究1では基礎的な検証を行い、研究2では臨床における検証を行った。研究1の被験者は健康成人男女30人で、測定項目はベッド挙上角度80度と30度における脳波パワー値と主観調査である。80度は自力坐位に近く、30度は臨床で用いられる角度であることより設定した。結果、30度よりも80度の方が有意な脳活性が示され、主観調査は脳波の結果と一致していた。研究2では、まず健康高齢者男女10人を被験者として予備実験を行った。 ベッド挙上角度は臨床で用いられる70度と30度とした。結果、70度に一部有意な脳活性が認められたのみで、成人と高齢者ではベッド上坐位における脳活動が異なることが示されたため、本実験では、ベッド上と椅子（車椅子）坐位の実験を行うこととした。本実験の被験者は介護老人福祉施設入居者男女17人であった。結果、椅子坐位のみに有意な脳活性が認められ、大脳を活性化させる看護ケアとしては、ベッド上よりも椅子坐位への援助を行う方が望ましいことが示唆された。
2.仰臥位から座位への姿勢変化がもたらす脳活性への有効性の研究 －脳波と近赤外線測定装置による脳活性の分析から－（修士学位論文）	単	2006年03月	大阪大学大学院	本研究の目的は、仰臥位からギャッチベッド上での坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を「脳波」と「大脳局所Hb値」の分析によって明らかにし、大脳を活性化させるケアとしての坐位姿勢援助の有効性について、基礎的な検証を行うことである。被験者は、研究の同意を得られた健康成人30名である。ベッドの挙上角度を変えた「実験A（坐位80度）」と「実験B（坐位30度）」の二つの実験を行った。測定項目は、脳波、左前額部の局所ヘモグロビン値（総Hb、酸化Hb、還元Hb）、自律神経機能評価指標（HF値：副交感神経活動指標、%LF値：交感神経活動指標）、主観調査である。分析を行う区間設定を「仰臥位」、「坐位1期」、「坐位2期」、「坐位3期」の各5分毎とし、実験A・Bのそれぞれの仰臥位時の値をbaselineとした。その結果、ギャッチアップによる坐位姿勢は、大脳と交感神経活動を活発化させる作用があることが明らかとなった。また、どの測定項目においても「実験A」の方が「実験B」よりも活性化を示し、重力による影響が考えられた。臨床における活用については、継続した研究が必要である。
3 学術論文				
1.看護師の点眼指導における実態とセルフケアの評価視点： 眼科病棟の点眼指導の実態調査から　《査読付き》	共	2024年12月	日本看護研究学会雑誌,47(5),997-1009	目的：看護師が実施する点眼指導の実態から、眼科患者が的確に点眼薬を投与するための評価視点を明らかにする。方法：全国438施設の眼科病棟の看護師に無記名自記式での質問紙調査を行った。結果：点眼指導は病棟で行うことが多く、点眼姿勢や点眼法は、点眼指導時に説明がある施設が有意に多かったが、成人と高齢者で指導内容を区別し実施しているかに有意な差はなかった。点眼姿勢では

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				ベッドに端座位姿勢が多く、点眼法は下眼瞼牽引法またはゲンコツ点眼法を用いていた。点眼指導は個別指導が多く、術後点眼日に合わせる施設が多かった。また、看護師は「加齢」、「独居」、「認知機能の低下」を点眼指導時の困難感として抱いていた。結論：点眼指導は必要な支援であり、看護師は患者の身体面のセルフケア評価を行っていた。さらに「加齢」、「独居」、「認知機能の低下」は点眼指導を行う際の患者のセルフケア評価視点となる。（担当頁特定不可能）共著者名：工藤大祐、徳重あつ子 、片山恵、岩﨑 幸恵
2.地域看護職が行う認知症高齢者のアドバンス・ケア・プランニング準備支援の検討 ―認知症初期集中支援チーム看護職の語りから― 《査読付き》	共	2024年3月	日本看護科学会誌、2023 、43 、pp. 889-898	目的：地域看護職が行う早期支援における認知症高齢者のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）準備支援を明らかにする。 方法：10施設・12名の地域看護職に半構造化インタビューを行い質的記述的に分析した。 結果：ACP準備支援は、【慎重な認知症診断・告知プロセスの検討】【本人の状況に適した生活を継続するための早期から切れ目ない支援】【認知症高齢者に対する家族の理解促進と困りごとの継続支援】【多職種・関係者協働のコーディネートとネットワークづくり】を実践していた。また地域看護職の多くは、早期のACPに関して、実施の難しさを感じていた。支援チームと兼務して長期にわたり支援の役割がある地域看護職は、ACPを意識しながらかかわりを持っていた。 結論：認知症高齢者のACP準備支援は、早期支援の中に含まれているものであり、意識してACPの準備性を高めていけるように進めていくことが必要である。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、分析内容の妥当性の検証を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：菊本 由里、徳重あつ子 、岩﨑 幸恵
3.閉じこもり傾向にある高齢者の身体・心理・社会的側面からの看護支援の検討―SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いた語りの分析を通して― 《査読付き》	共	2023年4月	日本健康医学会雑誌、32（1）、pp. 60-71	閉じこもり傾向にある高齢者の身体・心理・社会的側面の特性を明らかにし、看護支援を検討することを目的として、閉じこもり傾向にある高齢者2名に半構造化面接を行い、SCATの手法を用いて質的記述的に分析した。その結果、閉じこもるきっかけ、閉じこもりでの生活の実態、閉じこもりの影響などのストーリーライン、理論記述を導き出した。これらの内容から閉じこもりによって身体的な衰えの自覚や体調不調、認知機能低下の自覚、抑うつ状態が出現することや、他者との対面での直接的な交流が図れていなかったことが明らかとなった。さらに、閉じこもるきっかけとして生活に対する不安や新型コロナウイルス感染症に罹患する不安があり、不安による防衛機制から他者との接触がない閉じこもりという行動に至ったと考察した。また、数回にわたるインタビューにより閉じこもり解消に向けた行動変容が認められたため、閉じこもりでの生活を自らの言葉で語ることは行動変容につながる可能性が示唆された。これらをふまえた看護支援として①身体・心理・社会的な機能の低下を防ぐために、閉じこもりが解消できるように介入すること②閉じこもっている生活を自らの言葉で語る機会を作り、自己の現状を振り返り将来像をイメージできるように介入すること③早期に個々が持つ不安の内容を明らかにし、身体機能が維持できるよう介入することが効果的であると考えた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、分析内容の妥当性の検証を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：桧山美恵子、徳重あつ子 、岩﨑 幸恵
4.日本における認知症高齢者のアドバンス・ケア・プランニングの概念分析 《査読付き》	共	2023年1月	日本看護科学会誌、42、pp.468-475	目的：日本における認知症高齢者のアドバンス・ケア・プランニングの概念を概念分析により明らかにすることである。 方法：42文献を分析対象としRodgersの概念分析の手法を用い分析した。 結果：分析の結果、【本人・多職種・関係者全員がチームを組み関係構築】、【代理意思決定者の選定】、【倫理的に適切な事前指示書の共有】、【人生の最終段階に向けた家族の準備】、【早期から最期まで継続した本人中心の意思決定】、【望む生き方の最善を考える取り組み】の6属性と、4先行要件、3帰結が抽出された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5.出雲地域における在宅高齢者の死生観と人生の最終段階の医療に関する意識との関連（第2報)― 死生観に関する理由づけの様相― 《査読付き》	共	2022年7月	日本健康医学会雑誌、31(2)、pp. 181-189	結論：本概念は、「認知症の変化、進行、不安に伴い、将来の意思決定に向けて環境を整備し、認知症早期から本人と関係者全員が関係構築しながら、事前指示書の共有、代理意思決定者の選定、人生の最終段階に向け家族も準備し、最期まで継続した本人中心の意思決定と望む生き方の最善を考える取り組みのプロセス」と定義した。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、分析内容の妥当性の検証を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：菊本 由里、徳重あつ子 、岩﨑 幸恵 本研究は、出雲地域在宅高齢者における人生の最終段階の医療に関する意識と死生観との関連性を検討した第1報の続報である。目的は、出雲地域在宅高齢者における死生観に関する理由づけについて質的に分析し、その様相を明らかにすることで、アドバンス・ケア・プランニング(別名「人生会議」)の普及に向けた支援の示唆を得ることである。高齢者クラブ会員800名に対する意識調査で回答のあった550名のなかから、属性や死生観の「はい・いいえ」の選択および自由記述欄のすべてに欠損のあった場合を除く252名を分析対象とした。結果、《死は不可避である》、《死ですべて終わりになる》、《制御できない死がある》、《死の準備がある》、《死を達観している》、《死を考えてもどうしようもない》、《死を漠然と想像している》、《現世に未練がある》、《死が怖いから考えたくない》、《宗教の教えや体験を信じている》、《現世と来世はつながっている》、《心身の苦痛を予期している》、《未知の世界である》、《来世は苦しみがない》、《死の現実味がない》、《一日一日大切に生ききる》、《生きる上で苦しみから逃げない》、《家族や地域社会に貢献する》、《個人の努力や医学の進歩で延命できる》、《使命を見出せるよう努力する》、《死後のことは考えない》、《寿命がわからないから生きられる》、《子孫繁栄を願っている》、の23カテゴリーからなる【死は避けられないと受け止めている】、【死の恐怖を感じないよう気持ちに折り合いをつける】、【いのちが尽きるまで精一杯生きる】の3コアカテゴリーが抽出された。 本人担当部分：研究計画、分析の妥当性の検証を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：加藤 さゆり、徳重あつ子
6.高齢者の閉じこもりの概念分析 《査読付き》	共	2022年7月	日本健康医学会雑誌、31(2)、pp. 170-180	高齢者の閉じこもりの定義と特徴を明らかにし、閉じこもり改善に向けた介入方法を検討することを目的として、「高齢者の閉じこもり」を主題とした31の日本語文献を対象にRodgersの概念分析を行い、属性、先行要件、帰結を明らかにした。属性は4つのカテゴリー、先行要件は6つのカテゴリー、帰結は4つのカテゴリーによって構成されていると判断した。属性の4つのカテゴリーにもとづき、高齢者の閉じこもりを「加齢変化の影響を受けて移動能力が低下し外出できないこと、あるいは、移動能力はあるが本人の意思で外出しないことにより、生活活動範囲が自宅に限定され、外出頻度が週1回未満の状態」と定義した。先行要件の6つのカテゴリーから高齢者の閉じこもりは身体的・精神的・社会的な要因が相互に関連することで発生し、帰結の4つのカテゴリーから閉じこもりとなった結果、身体・精神機能の低下、社会とのつながりの減少が引き起こされると考察した。閉じこもり改善に向けた介入として、移動能力や外出意欲を向上させ、生活活動範囲を広げ週1回以上は外出することが重要であることが示唆された。閉じこもりによって生命の危機的状態を回避するためには、医療の知識のある看護職は積極的に見守りを行いながら、身体・精神機能の低下を見極め、タイミングを逃さないように介入することが重要であると考える。また、閉じこもりが及ぼす影響を伝え行動変容を促す介入も重要であると考える。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：桧山美恵子、徳重あつ子 、岩﨑幸恵

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7.高齢者入所施設における精神障害者へのケアの現状と課題(第二報) 施設で生活する高齢精神障害者の語りを通して 《査読付き》	共	2022年6月	日本精神保健看護学会誌、31(1)、pp.19-28	本研究の目的は、高齢者入所施設で生活する高齢精神障害者の語りを通して、援助職者から受けるケアに関する体験を描き出し、施設における精神障害者へのケアの課題を考察することである。半構造化インタビュー調査にて、認知症を除く精神障害の診断名をもつ65歳以上の高齢者から(1)施設入所の経緯(2)印象的なケア体験(3)ケアへの思い等の自由な語りを得た。同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成し分析した。参加者は4施設の10名であり、参加者の語りからは次のようなケアのストーリーが明らかになった。精神障害をもつことによって自尊感情が傷ついている参加者にとっ、として関心を向け、ケアしてくれる援助職者との関係性を築いていくプロセスを通して、援助職者との関係で傷ついたりしながらも、病気や生活に対する捉え方が前向きになっていった。これはとして認められた感覚の獲得につながっていた。施設でのケアにおいては、入所者の自尊感情が回復できるような対人関係のあり方が重要な課題であると考えられた。 本人担当部分：分析内容の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：鷺忍、寳田穂、和泉京子、徳重あつ子
8.高齢者の点眼失敗要因に着目した椅子の背もたれ 使用による点眼姿勢の比較 《査読付き》	共	2022年4月	バイオメカニズム学会誌、46(2)、pp.95-103	本研究の目的は、高齢者の普段の点眼姿勢の実態の及び、点眼時の椅子の背もたれ使用の有無と点眼成否との関係性を明らかにすることである。研究方法は、高齢者の普段の点眼姿勢の実態調査に加え、高齢女性に背もたれの有無で点眼を行ってもらい、点眼動作の動作解析を行った。動画より、点眼時の頭部後傾角度、肘関節角度、体幹後傾角度、点眼容器角度を測定し、背もたれの有無と点眼の成否、点眼液滴下の位置ずれを比較した。背もたれ無しでは、失敗事例で有意に頭部後傾角度が小さく、背もたれを使用すると点眼時に体幹が後傾し頭部が後傾しやすくなり、点眼時における滴下の位置ずれや点眼容器先端との接触による失敗リスクの軽減が望めた。背もたれを使用した点眼姿勢は安全で実施しやすい方法であり、点眼指導に取り入れることが可能であると言える。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 工藤大祐、徳重あつ子 、片山恵、田丸朋子
9.高齢女性の後頸部温罨法がもたらす入眠誘導についての基礎的検証 《査読付き》	共	2022年3月	看護人間工学会誌、3、pp21-31	本研究の目的は、健康な高齢女性の後頸部温罨法は入眠を誘導するか基礎的な検証を行うことである。高齢女性12名(70.6±2.2歳)に、後頸部温罨法を30分間行い、心臓交感神経活動バランス(LF/HF値)、両手の手掌表面皮膚温、脳波の測定を行った。また、同一被験者に後頸部温罨法を行わない非罨法日を設定し、同様の測定を行った。結果、非罨法日と比べて温罨法日は実験開始20分後にθ帯域のパワー値の有意な増加およびα帯域のパワー値の有意な減少を認めた。このことから、後頸部温罨法の施行は、眠気を誘発し、入眠を誘導させる可能性が考えられた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：川原恵、片山恵、徳重あつ子 、田丸朋子
10.本学看護学部「まちの保健室」に参加する地域住民の健康状態と健康行動 《査読付き》	共	2021年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、6、pp.79-89	本学看護学部「まちの保健室」に参加する地域住民の基本属性や参加状況別にみた健康状態および健康行動を明らかにするため、2019年7月と8月の参加者を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。基本属性、「まちの保健室」参加状況と、健康状態や健康行動の関係について、Pearsonのχ2検定またはFisherの正確確率検定を用いて分析を行った。参加者の健康状態や健康行動は参加回数や目的等により異なり、健康指標の測定を目的に参加した人は健康のために気をつけていることがある割合やがん検診の受診率が低いこと等が明らかとなった。「まちの保健室」は住民の生活の場である地域で実施しており、自ら相談の場や医療機関、健診や検診にアクセスできない人にもアプローチできる場となっている。より多くの人が関心を持てるよう健康指標の測定等を行い、その後の健康相談により自身の健康に目を向けられる機会とする必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
11.出雲地域における在宅高齢者の 死生観と人生の最終段階の医療に関する意識との関連－アドバンス・ケア・プランニングの実 現に向けての検討－ 《査読付き》	共	2020年10月	日本健康医学会雑誌 、29（3）、pp.288-302	共著者名：松井菜摘、阪上由美、新田紀枝、田野晴子、桧山美恵子、和泉京子、寳田穂、徳重あつ子 、宮嶋正子、久山かおる、早川りか、谷澤陽子、阿曽洋子 本研究の目的は、出雲地域の在宅高齢者における人生の最終段階の医療に関する意識と死生観との関連性を検討することである。2019年1月～3月に高齢者クラブの会員800名に自記式質問紙を配布し、550名から回答を得た(回収率68.8%)。そのうち年齢と性別に欠損のない531名を分析対象とした。結果、「死を考えることを避けている」27.1%、「死とは何かよく考える」21.5%で、死について考えることを避けてはいないが関心は低いことが示された。また6割近くが「死が怖くない」と回答しており、特に後期高齢者に多かった。生きる時間が限られているときに大切にしたいことで最も多かったのは「自分で身の回りのことができる」で、生き続けることが大変だと思う状況については「人工呼吸器など機械の助けがないと生きられない」が最も多かった。「死が怖くない」人は、生きる時間が限られているときに「仕事や社会的な役割が続けられる」ことや「家族の負担にならない」ことを大切にしていた。また延命治療は受けないことを希望し、すでに家族らと話し合っていた。一方で「死が怖い」人は、「家族や大切な人のそばにいる」ことを大切にしていた。さらに「死を考えることを避けている」人は延命治療を受けることを希望、あるいは「わからない」と回答し、家族らと話し合っていなかった。一方「死を考えることを避けていない人」は延命治療を希望し、家族らとの話し合いもすでに行われており、話し合いについても肯定的であった。以上より、死への恐怖が死を考えることを避け、延命治療に対する意思決定と家族らとの話し合いの未達に影響していると考えられた。しかし「死は恐怖でなく、回避していない」とする高齢者が多かったため、死への関心や話し合いの意識が高まることで家族らとの話し合いに至る可能性があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能）
12.地域包括支援センターの看護師による閉じこもり高齢者の家族に対する介入内容 《査読付き》	共	2020年4月	日本看護学会論文集: 在宅看護、50、pp.51-54	共著者名：加藤 さゆり、徳重あつ子 、杉浦 圭子、久山 かおる、布谷 麻耶 閉じこもり高齢者の家族に対して地域包括支援センターの看護師が介入した内容について、インタビューガイドを用いた半構造化面接調査を実施した。ひきこもり高齢者の支援にかかわった経験のある、A市の地域包括支援センターの看護師6名(男性1名、女性5名、平均年齢44.2歳、看護師経験年数平均21.5年)を対象とした。録音した面接内容から逐語録を作成し、コード化、カテゴリー化の分析を行った。語られた事例は9事例で、閉じこもり高齢者の年齢は80歳代が6事例で最も多かった。介入した家族は配偶者5事例、息子や娘が5事例(重複あり)、姉妹が1事例であった。閉じこもり高齢者の家族に介入した内容として、分析の結果、20の最終コード、8のサブカテゴリー、「家族の協力を引き出すかかわり」「家族が疾患に対する理解を深めるかかわり」「家族の介護負担を軽減するかかわり」の三つのカテゴリーが抽出された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能）
13.高齢者の頭部挙上角度の違いからみた仙骨部・臀部血流量の比較 《査読付き》	共	2020年4月	日本健康医学会雑誌、29（1）、pp.46-52	共著者名：桧山 美恵子、横島 啓子、徳重あつ子 、杉浦 圭子、岩崎 幸恵 本研究は、高齢者の体型差を考慮した褥瘡予防ケアのための基礎研究として、肥満体型の高齢者の頭部挙上角度別に、仙骨部・臀裂部・臀部の血流量を比較することにより、肥満体型高齢者への適切な挙上角度を検討する事を目的とした。対象は、肥満体型高齢者14名であり、頭部挙上20度、25度、30度の仙骨部・臀裂部・左右臀部の計4ヶ所の血流量を測定した。その結果、頭部挙上20度では、圧迫によるうっ滞は認めたが、血流量の減少は認めず、各部位に褥瘡発生に繋がる要因は認められなかった。頭部挙上25度においては、圧迫によるうっ滞の後、20分経過後より血流量の減少が左臀部を除く

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				部位においてみられた。頭部挙上30度では、特に左右臀部にうっ滞の程度も大きく、その後の減少も他の角度よりもみられた。これらより、肥満体型の高齢者においては、褥瘡予防のための挙上角度として30度ルールを適応すると、特に臀部に負荷をかける可能性があると考えられた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：岩崎 幸恵、杉浦圭子、片山 恵、田丸 朋子、山口 晴美、徳重あつ子 、阿曽 洋子
14.介護老人保健施設における高齢者の下肢浮腫ケアに関する看護職者の取り組みの実態 《査読付き》	共	2020年3月	看護人間工学会誌、1、pp.57-65	本研究の目的は、介護老人保健施設における下肢浮腫軽減・予防プログラム開発の基礎資料として、高齢者の下肢浮腫ケアに対する看護職者の取り組みの実態について明らかにすることである。対象者は施設の看護責任者で、郵送による無記名自記式質問紙調査法により89名から回答を得た。結果から、ケア実施の目安を設定し必要時にケア実施すること、管理栄養士と医師と「ケアの相談」について連携をとることの必要性が示唆された。また、下肢浮腫保有率20%は下肢浮腫ケアの状況をみる一つの指標となる可能性があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：細見 明代、徳重あつ子 、阿曽 洋子
15.若年者および高齢者の自己点眼の成功・失敗に関 係する動作要因 《査読付き》	共	2020年3月	看護人間工学会誌、 1 、pp.25-30	本研究の目的は、自己点眼の失敗要因を動作の観点から明らかにし、投薬するための看護援助への示唆を得ることである。研究方法は、若年者と高齢者に点眼してもらい、この動作を撮影した。動画より点眼時の頸部後屈角度、肘関節角度を測定し、若年者と高齢者について、成功と失敗、不潔の有無で比較した。点眼は高齢者の失敗が有意に多く、頸部後屈角度において有意差が認められた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：工藤 大祐、片山 恵、徳重あつ子 、阿曽 洋子
16.地域高齢者への死生観インタビューによる2年課程定時制に通う看護学生の高齢者の死生観の理解と活用 《査読付き》	共	2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル、4、pp.77-87	目的は、2年課程定時制に通う看護学生が、地域高齢者に対する死生観インタビューを通して、高齢者の死生観をどう理解し、死生観インタビューで得た学びをどう活用するのかを明らかにし、後の臨実習にどう役立てるのかについて考察することである。死生観インタビュー前の学生の死生観アンケート、死生観インタビュー後に提出したグループの学びレポートを分析した質的記述的研究である。2年課程定時制看護学生は、地域高齢者への死生観インタビューを通して、高齢者の【生に対する価値観】と【死に対する価値観】を理解した。また、学生は地域高齢者への死生観インタビューで得た学びを《自己の死生観の深まり》《人生の目的や目標》《人とのつながり》など自己の【死生観の深化に活用】することや《高齢者の理解》《死生観に対するアセスメントの実際》など【臨地実習に活用】することが本研究で示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：加藤 さゆり、横島 啓子、徳重あつ子 、久山 かおる
17.地域包括支援センターの看護師による閉じこもり高齢者への介入内容 《査読付き》	共	2019年2月	第49回（平成30年度）日本看護学会論文集 在宅看護、pp.19-22	閉じこもり高齢者が何らかの支援の利用に至ったプロセスを明らかにするために、看護師がどのような介入を行ったか検討することを目的として研究を行った。その結果、地域包括支援センターの看護師は、①定期的に訪問し、対象者のニーズをつかみ信頼関係を形成し、②看護師としての知識や技術を活用しながら、心身の状態から必要なサービスを提案し、継続した関係性への支援を行うことで、閉じこもり高齢者がサービスを含めた支援を受けることができるように介入していた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：桧山美恵子、横島啓子、徳重あつ子
18.介護老人保健施設入居者における手指刺	単	2018年01月	日本健康医学会誌、26（4）、pp.	寝たきりの高齢者や認知症のある高齢者においては、食事摂取時に大脳の覚醒状態が十分でないと窒息の可能性がある。そこで、本研

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
激がもたらす脳活動から考える手洗いケア 《査読付き》			248-256	究では食前の手指の清潔ケアが生体を活性化させるかどうか、また熱布と温湯を用いたケアの違いによって大脳の活性化に及ぼす影響が異なるかどうかについての基礎的な検証を行った。その結果、高齢者の手洗い援助を行う際には、大脳活性の観点から熱布使用よりも温湯使用の方が望ましいことが示唆された。
19.排尿障害を有する回復期病棟脳卒中患者に対する排尿援助についての実態調査 《査読付き》	共	2017年12月	リハビリテーション連携科学、18（２）、pp.143-151	【目的】回復期脳卒中患者の排尿援助の実施状況、特に排尿日誌の活用、行動療法の実施、多職種連携の状況について明らかにする。【方法】近畿圏下でリハビリテーション科を有し、脳血管疾患等リハビリテーションの施設基準認定を受けている病院を等間隔抽出法により選定し、回復期脳卒中患者が入院する病棟師長から排尿援助についての回答を得た。【結果】排尿日誌の活用割合は、32.2%で、行動療法の実施割合は、75.7%であった。行動療法を未実施の病棟のうち20.8%は行動療法を聞いたことがないと回答していた。排尿援助は、看護師と看護補助者もしくは介護職の組合せで74.3%が連携していた。【結論】排尿日誌の活用割合は、行動療法の実施割合の半数程度であった。排尿日誌の活用割合が行動療法の実施割合に近づくこと、行動療法の普及、実施率の向上が望まれる。また、排尿援助は、看護師と看護補助者もしくは介護職が連携して実施していることが多かった。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 鈴木みゆき、徳重あつ子 、竹田千左子
20.高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者における排尿状態と非麻痺側上肢・下肢筋肉量との関係 《査読付き》	共	2017年7月	日本健康医学会雑誌、26（２）、pp.103-111	研究目的は、高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者の排尿状態と非麻痺側筋肉量との関連を明らかにし、非麻痺側筋肉量との関係から排尿回数、尿意回数、失禁回数、トイレ誘導回数、トイレ排尿回数の意義を検討することである。対象は、回復期リハビリテーション病棟に入院中の高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者8名である。研究方法は、入院2週目と10週目に排尿日誌を活用して排尿状態を把握するとともに生体電気インピーダンス法による筋肉量の測定を行い、その関係を分析した。その結果、初回調査では、非麻痺上肢筋肉量が失禁回数と負の相関関係(r=-0.88)にあり、トイレ誘導回数、トイレ排尿回数と正の相関関係(いずれもr=0.78)にあった。介助を受けながらであっても、失禁回数が少ないこと、トイレに誘導される回数が高いこと、実際にトイレで排尿する回数が多いことが、非麻痺側上肢筋肉量が多いことに関係していた。また、初回調査では、非麻痺側下肢筋肉量と尿意回数、トイレ誘導回数、トイレ排尿回数との間に有意な正の相関関係(r=0.82-0.88)、失禁回数との間には負の相関関係(r=-0.89)が認められた。2回目調査では、非麻痺側下肢筋肉量と尿意回数、トイレ排尿回数との間で有意な正の相関関係(いずれもr=0.80)、失禁回数とは負の相関関係(r=-0.94)が認められた。尿意があればあるほど非麻痺側下肢筋肉量が多くなる関係性があった。また、トイレに行けば行くほど非麻痺側下肢筋肉量が多くなる関係性も認められた。そして、失禁が少なければ少ないほど非麻痺側下肢筋肉量が多くなる関係性が明らかになった。排尿行動は、移乗や移動、立ち上がり、立位保持、衣服の着脱などの多くの動作を含み、1日の中でも繰り返し行われる。失禁の有無に関わらず、介助を受けながらであっても、トイレに行き、排尿を試みる動作の回数が多いことが、非麻痺側筋肉量の多さの観点から有意義であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：鈴木みゆき、徳重あつ子
21.訪問看護師からみた家族介護者の補完代替療法利用の傾向 《査読付き》	共	2016年12月	明治国際医療大学誌、15、pp.11-16	【目的】介護者の補完代替療法(CAM)の利用の傾向を把握することである。【方法】全国の訪問看護ステーションの約30%にあたる1、700事業所を無作為抽出し、訪問看護師を対象に自記式質問紙調査を行った。分析は質問項目ごとに単純集計を行い、CAMの実施の有無及びCAMへの興味の有無と、相談の有無、効果の有無との連関性をみるためにχ2検定を実施した。自由記載の文章は内容分析の手法を参考に行った。【結果】訪問看護師はケース全体のうち僅かな介護者に

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				CAM利用がみられ、「がん」の方を世話する介護者に多く、要介護者のADLによる差はなく、「マッサージ」「栄養補助食品」の利用と、「疲労回復」「精神安定」の利用目的が多い傾向があると把握していた。相談内容は【情報提供を希望する】【CAMを利用する理由】【利用に際して確認を求める】【利用の報告】の4個のカテゴリーに分類された。CAMを実施する事業所では介護者からの相談があり、CAMは効果があるとの報告が多かった。【考察】本結果は訪問看護師が日々の活動の中で得た情報であり、介護者一人一人の状況を反映しているとはいえないが、介護者のCAM利用や相談内容の傾向を把握できたと考える。 研究計画、分析方法の検討、調査実施を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田中小百合、<u>徳重あつ子</u>
22.家族介護者の補完代替療法利用に関する訪問看護師の認識《査読付き》	共	2016年5月	日本統合医療学会誌、9（1）、pp. 94-98	介護者自身の補完代替療法（CAM）利用について、訪問看護師はどのように認識しているのか明らかにすることを目的に、全国の訪問看護ステーションに郵送調査を行った。介護者CAM利用をどのように思っているか自由記述を求めた箇所についてテキストマイニング手法を用いて分析を行った。その結果、6回以上出現した語は61語あり、これらを対象にクラスター分析を行ったところ、8つの区分に分類された。クラスターの解釈を行ったところ、大きく「介護者がCAM利用することへの肯定的理解」「CAM利用方法への提案」「相談時の看護師対応」の3つに分類できた。介護生活の継続のためにもCAM利用を肯定的に捉え、必要性が高いと認識している看護師が多かった。 研究計画、分析方法の検討、調査実施を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田中小百合、<u>徳重あつ子</u>
23.Examining Handwashing Care in Assist-ed-Living Facilities from the Perspective of Hand and Finger Stimulation to Induce Brain Activation in the Residents （介護老人福祉施設入居者における手指刺激がもたらす脳活動から考える手洗いケア）《査読付き》	単	2016年02月	Open Journal of Nursing, 6 (2), pp.115-124	本研究では、介護施設に入居中の高齢者を対象に、食前の手指の清潔ケアが生体を活性化させるかどうか、また熱布と温湯を用いたケアの違いによって大脳の活性化に及ぼす影響が異なるかどうかについて、基礎的な検証を行った。その結果、高齢者の手洗い援助を行う際には、大脳活性の観点から熱布使用よりも温湯使用の方が望ましいことが示唆された。
24.The Direction of Research on Active Aging and Healthy Life Expectancy in Japan （日本におけるアクティブエイジングと健康寿命研究の方向性）《査読付き》	共	2014年05月	Open Journal of Nursing,4 (7), pp.475-482	日本では、2025年には団塊の世代と呼ばれる全国民の18.1%の人口が後期高齢者となるため、それを支える基盤づくりが必要である。そこで、本研究ではアクティブエイジングという側面から文献検索を行い、日本における取り組みや研究の動向を明確化し、次の研究課題を検討することを目的とした。「アクティブエイジング」と「健康寿命」の検索結果を合わせて、原著120件、総説・解説・特集213件をそれぞれ分析対象とし、全ての論文のabstractについて、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。その結果、原著論文からは【保健統計】、【性別】、【年齢】、【疾患】等の8カテゴリが抽出された。総説・解説・特集からは【方向性】，【疾患】、【生活】等の16カテゴリが抽出された。いずれにおいても【看護】というカテゴリは抽出されなかった。原著論文で取り扱われている疾患は、脳血管疾患と骨粗鬆症であり、これは寝たきりやQOLの低下につながりやすいことから、「アクティブエイジング」、「健康寿命」という側面では研究が多いことが考えられた。総説・解説・特集からは、疾患としては生活習慣病と更年期が抽出された。原著論

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				文とのカテゴリの違いは、日本の研究者が国内で原著として発表せずに国外で発表している可能性が考えられた。今回の研究を行うことで、日本においては「アクティブエイジング」という用語を用いた研究がほとんど行われていないことが明らかとなった。2025年を迎えるためには、更に「アクティブエイジング」、「健康寿命」という視点での研究数を増やしていく必要性があると考えられた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、データ分析、研究の進行管理を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：徳重あつ子、荒木大治、鈴木みゆき、岩﨑幸恵、小澤みずほ
25.The Reinforcement of Local Residents' Sense of Coherence: A Longitudinal Study（地域住民の健康保持能力（ＳＯＣ）の強化に関する縦断的検討）《査読付きを英文化》	共	2014年03月	Yearbook on Journal of the Japan Society of Nursing Research 2013, http://www.jsnr.jp/yearbook/	健康保持能力といわれる首尾一貫感覚（以下、ＳＯＣとする）の強化要因の明確化を目的とし、20歳以上の地域住民3,000人を対象に、平成14年及び平成18年に自記式質問紙による縦断調査を実施した。両年の回答に不備のない360人分を分析対象とした。日本版ＳＯＣ13項目スケールにてＳＯＣの経年的変化を求め、「性別」「年齢」「学歴」「世帯の収入」「社会との関わり」「ソーシャルサポート」「幼少期体験」「青年期体験」「20歳までの経済状況」「生活ストレス」「緊張処理の成功体験」との関連性をPearson積率相関係数で算出し、相関がみられた項目の重回帰分析を行った。結果、「20歳までの経済状況」「緊張処理の成功体験」が強化要因として抽出された。豊かな「20歳までの経済状況」はＳＯＣを低下させ、「緊張処理の成功体験」はＳＯＣを強化することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田中小百合、桝本妙子、堀井節子、三橋美和、徳重あつ子、福本恵
26.高齢男性の回復期脳卒中片麻痺患者における非麻痺側筋肉量の変化からみた排泄援助のあり方についての検証《査読付き》	共	2014年3月	老年看護学、18（2）、pp.38-47	本研究の目的は、高齢男性の回復期脳卒中の片麻痺において、排泄援助方法によって非麻痺側筋肉量の変化に違いがでるのかを明らかにすることである。65歳以上の回復期脳卒中患者14人を対象に、入院2週目と3か月目に排尿援助の調査および非麻痺側筋肉量の測定をした。その結果、尿意のある患者は、全員が車いすで移動し、トイレでの排尿を行っていた。一方で、尿意があいまいもしくはない患者は、全員が排尿に伴う移動はなく、オムツもしくは膀胱留置カテーテルでの排尿を行っていた。トイレで排尿を行っていた患者（筋肉量4.30±1.02kg、増加量0.04±0.61kg）は、そうでない患者（筋肉量3.69±0.58kg、増加量-0.14±0.86kg）に比べ、有意に非麻痺側下肢筋肉量が大きく（ｐ＝0.014）、入院中の非麻痺側下肢筋肉量の増加も大きい傾向（ｐ＝0.094）があった。介助を受けながらであっても、立位保持が促される排尿援助を受けることにより、非麻痺側下肢筋肉量の維持・向上につながる可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：鈴木みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵
27.地域看護学実習でのHIV/ エイズ予防普及啓発活動から得た学び 《査読付き》	共	2013年09月	明治国際医療大学誌、9、pp.23-28	保健師とともに地域看護学実習の一環として行った啓発活動から得た学びをHIV/エイズに関する知識面と保健師活動の2点から明らかにすることを研究目的とした。研究対象は2010 年12月の地域看護学実習中に啓発活動を体験した看護学生6 名である。 対照群として同管内で同時期に実習を行った5 名を設定し、実習前後に2群への質問紙調査を実施した。その結果、知識問題における実習前後の得点差の2群間比較では、HIV/ エイズの基礎的問題で有意差がみられ、項目ごとの正答率も上昇していた。保健師活動についての自由記述からは『啓発活動の手段』『啓発活動のねらい』『HIV/ エイズに関する保健師活動の実際』のカテゴリー、啓発活動を体験した学生から多くのサブカテゴリーが抽出された。このことより、啓発活動という1 つの実習体験が保健師活動の学びの拡大に繋がることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
28.The effects of color stimulus on autonomic nervous system activity and subjective arousal state （自律神経活動と主観的覚醒度に及ぼす色彩刺激の効果）《査読付き》	共	2013年09月	International Journal of Japanese nursing care practice and study, 1(2), pp.13-17	共著者名：田中小百合、松川泰子、徳重あつ子 本研究では、家庭における色彩刺激が自律神経活動と主観的覚醒度に及ぼす影響について検証を行った。この研究は高齢者の意識レベルの向上を目指したケアを実践するための基礎研究である。テーブルクロスの色のみを変化させた。検証にはマンセル色相環を用いた。色は高彩度の赤、黄、青、無彩色は黒と白を選択した。日常生活で用いられる黒、黄、白のテーブルクロスで、自律神経活動の有意な活性化が認められた。同時に、赤を除いたすべての色で、緊張軽減の効果があった。我々は、日常の看護の中で身体的、精神的活性化のために色彩刺激を用いることが可能であると考えている。 本人担当部分：研究計画、実験・分析方法の検討、実験実施、データ分析等を担当。（担当頁特定不可能）
29.訪問看護における補完代替療法実施の実態調査《査読付き》	共	2013年05月	日本統合医療学会誌、6（1）、pp.83-92	共著者名：徳重あつ子、山本美輪 訪問看護における補完代替療法（CAM）の実施について実態調査を行い、CAM普及のための示唆を得ることを目的とした。全国のステーションの約30％（1,700施設）を無作為抽出し、質問紙の郵送調査を行った。回答のあった約35％がCATを実施していたが、中には初めて知ったとの回答もあり、CAMの知識と実践力はステーションによって差があることが明らかとなった。CAMを実施している施設では、費用はステーションからの持ち出しが半数であった。また、CAMの継続のためにはスタッフの知識や技術が必要との回答が多かった。CAMを実施していない施設スタッフの興味と将来の実施可能性との関係について、Ｘ2独立性の検定を行ったところ、p＝0.000で有意な関連が認められた。CAMの普及には、知識や技術の向上のための機会の提供や、スタッフの興味への働きかけが必要であると考えられた。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討、調査用紙発送、データ入力、データ分析等を担当。（担当頁特定不可能）
30.脳波からみた介護老人福祉施設入居者における仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活動《査読付き》	共	2011年07月	日本老年医学会雑誌、48(4)、pp.378-390	共著者名：徳重あつ子、田中小百合 本研究では、仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を脳波のパワースペクトルを用いて分析し、姿勢変化がもたらす脳活動について検証を行うことを目的とした。対象者は介護老人福祉施設入居者17人（男性4人、女性13人平均年齢85.35±8.26歳）である。データ収集は、頭側挙上を行ったベッド上での坐位と椅子又は車椅子を利用した坐位の2種類の設定で行った。測定項目は、脳波（8点，Fp1：左前頭極部、Fp2：右前頭極部、F3:左前頭部、F4:右前頭部、C3:左中心部、C4:右中心部、O1:左後頭部、O2:右後頭部）である。測定時間は、仰臥位5分、坐位15分、会話5分である。分析区間は5分毎とし、ベッド挙上時と椅子への移乗時のデータは除外して分析した。脳波はFFT後、α帯域成分（8～13Hz）とβ帯域成分(13～30Hz)のパワー値の平均値を区間毎に算出した。 ベッド上坐位では、仰臥位時と比較して姿勢変化による有意なパワー値の増加はみられなかった。椅子坐位では、全ての測定部位で有意なパワー値の増加を認めた。また，全部位で椅子坐位の方がベッド上坐位よりパワー値が有意に大きい時間帯が多かった。特に会話においては，Fp2以外は全て椅子坐位の方がベッド上坐位よりもパワー値が有意に大きかった。このことより、仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす大脳活性は、姿勢変化後20分間に関してはベッド上坐位よりも椅子坐位の方が大きいことが示された。 本人担当部分：研究計画、実験・分析方法の検討、実験実施、データ分析等を担当。（担当頁特定不可能）
31.Relativity of postural change into prone position and effect of bowel intestinal peristalsis	共	2011年03月	Health and Behavior Sciences,9(2), pp.117-126	共著者名：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、片山恵、木村静 この研究の目的は、健康な高齢者を対象にして、腹臥位への体位変換と腸蠕動運動の促進効果の関連性を明らかにすることと、排便促通効果へ方向づけをすることである。実験は、65歳以上の健康な高齢者21名（男性13名、女性8名）に対して行われた。実験では、仰臥位を10分間続け、続いて腹臥位を30分間維持し、次に仰臥位を10分間続けた。それぞれの体位期間を10分間で分けた。そして、それらの期間を仰臥位前期、腹臥位Ⅰ期、腹臥位Ⅱ期、腹臥位Ⅲ期そして

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
activation for elderly people（高齢者に対する腹臥位への体位変換と腸蠕動運動促進効果の関連性） 《査読付き》				仰臥位後期と設定した。収集したデータは腸蠕動運動を調べるための腸音と自律神経活動（交感神経指標：LF / HF比、副交感神経指標：LogHF）であった。各期間に、腸音と自律神経活動の多重比較を行った。結果として、腸音においては、腹臥位への体位変換中の30分間に、減少していく傾向が現れた。仰臥位前期、腹臥位Ⅱ期、腹臥位Ⅲ期と仰臥位後期の中では、仰臥位後期の腸音が有意に増加していた(p0.05)。30分間の腹臥位への体位変換後の仰臥位後期に腸音パワー値の増加があったことから、腸蠕動運動の促進には、腹臥位への体位変換による腸管への刺激や腹部刺激に関連する自律神経の反射、血流量の変化が影響していると考えられた。本研究の結果から腸蠕動運動は腹臥位から仰臥位への体位変換によって促進することが明らかになり、排便促通効果にむけての示唆を得ることができた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：片山恵、阿曽洋子、伊部亜紀、鈴木みゆき、<u>徳重あつ子</u>、本多容子、田丸朋子
32.Using salivary amylase to measure stress caused by urinating in diapers（唾液アミラーゼを用いたオムツ内排泄に関連したストレスの測定） 《査読付き》	共	2011年03月	Aino journal,9, pp.11-13	この研究では、客観的におむつ内排尿によって生じる患者のストレスを唾液アミラーゼを用いて測定を行った。研究対象者は、健康な20-21歳の成人であった。唾液アミラーゼの平均値は、排尿前51.0（SD±14.6）KIU/ L、排尿後38.1（SD±12.3）KIU/Lであった。安静時の唾液アミラーゼの平均値は32.8（SD±13.3）KIU/ であった。これらの結果は、おむつ内での排尿に関連したストレスが唾液アミラーゼを用いて測定することができることを示唆している。この結果は、認知症や廃用症候群等でコミュニケーションをとることが難しい人々のおむつの使用に関連するストレスの評価に適用することができる。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：山本美輪、<u>徳重あつ子</u>
33.腹臥位への体位変換が便秘症の糖尿病患者にもたらす排便促通効果 《査読付き》	共	2011年01月	日本健康医学会雑誌、19(4)、pp. 186-194	本研究の目的は、便秘症の糖尿病教育入院中の患者に対し腹臥位の施行による排便促通効果を検証し、腹臥位施行が便秘症に対する対症療法になり得るかを検討することである。結果、腹臥位実施前後の仰臥位での腸音パワー値の比較において、腹臥位施行後の仰臥位の腸音パワー値が増加しており有意差が認められた（p＝0.004）。 このことから腹臥位施行による腸蠕動運動の促進が確認された。また、実験群と対照群を設定し、継続的に腹臥位を施行し、施行前と施行中の排便回数を比較した。その結果、腹臥位実施前と後では実験群の方が排便回数が多く、有意差が認められた。実験群と対照群の排便回数の比較では、実験群の方が有意に排便回数が多かった。これらの結果から、腹臥位施行による排便促通効果が明らかとなった。腹臥位は、特殊な道具や技術が必要ではなく簡便に施行できる方法であることから、便秘症を改善する対症療法となり得ることが示唆された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。 （担当頁特定不可能） 共著者名：片山恵、阿曽洋子、伊部亜希、鈴木みゆき、<u>徳重あつ子</u>、本多容子、田丸朋子
34.移動援助時におけるベッドの高さの違いが患者におよぼす影響について -頚部後屈角度・心拍数の観点から- 《査読付き》 （日本看護研究学会　奨励賞受賞）	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、33(5)、pp. 25-32	本研究の目的はベッドの高さの違いが患者に与える影響について検証することである。被験者は70歳以上の健康高齢者19名とし、患者が昇降しやすい高さと看護師が作業しやすい高さのベッドそれぞれで移動援助を行った。測定指標は頚部後屈角度及び心拍数とした。最大頚部後屈角度は看護師の作業しやすい高さに比べ、患者の昇降しやすい高さでの援助時の値が有意に大きかった（ｐ＜0.01）。心拍数は平均値及び変化率ともに移動前・移動中・移動後のどの区間も有意差はなかった。しかし平均値及び変化率の多重比較では、看護師の作業しやすい高さでは差がなく、患者が昇降しやすい高さのベッドでのみ、移動前と移動中の値との間に有意な増加がみられた

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				（ｐ＜0.01、ｐ＜0.05）。以上より、移動援助時にベッドを看護師の作業しやすい高さに調節すると患者の頚部や心拍数への影響が少なくなるといえる。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田丸朋子、阿曽洋子、伊部亜希、本多容子、木村静、鈴木みゆき、徳重あつ子、細見明代
35.在宅女性高齢者に対する「転倒予防ケア」としての足浴の有効性の検討　《査読付き》	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、33(5)、pp.55-63	幅広い高齢者が対象となる転倒予防として、足へのケアが有効であると考え足浴に着目した。被験者は女性高齢者20名で、1人の被験者に対し、座位にて足浴を行う足浴実験と、行わない対照実験の2種類を実施した。実験の前後で足関節背屈角度と足底荷重最大値の測定を行い、測定値の前後差との関連を検討した。その結果足浴後、背屈角度及び足指部の荷重最大値が有意に増加していた。また、実験前の背屈角度は転倒経験のある群の方が、ない群より有意に小さかったが、足浴後は差はなくなった。さらに足浴後、増加した背屈角度及び足指部の荷重最大値と、転倒経験には相関がみられた。結果より、足浴の温熱効果で背屈角度が増加し、重心が前方に移動しやすくなったため足指部の荷重最大値が増加したと考えられる。この事から前身力が向上し、歩行状態が改善されたと推測される。ここから足浴は女性高齢者の「転倒予防ケア」として有効であることが示唆された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：本多容子、阿曽洋子、伊部亜希、田丸朋子、木村静、徳重あつ子、鈴木みゆき、細見明代
36.　地域住民の健康保持能力（ＳＯＣ）の強化に関する縦断的検討 《査読付き》	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、33(5)、pp.75-82	健康保持能力といわれる首尾一貫感覚（以下、ＳＯＣとする）の強化要因の明確化を目的とし、20歳以上の地域住民3,000人を対象に、平成14年及び平成18年に自記式質問紙による縦断調査を実施した。両年の回答に不備のない360人分を分析対象とした。日本版ＳＯＣ13項目スケールにてＳＯＣの経年的変化を求め、「性別」「年齢」「学歴」「世帯の収入」「社会との関わり」「ソーシャルサポート」「幼少期体験」「青年期体験」「20歳までの経済状況」「生活ストレス」「緊張処理の成功体験」との関連性をPearson積率相関係数で算出し、相関がみられた項目の重回帰分析を行った。結果、「20歳までの経済状況」「緊張処理の成功体験」が強化要因として抽出された。豊かな「20歳までの経済状況」はＳＯＣを低下させ、「緊張処理の成功体験」はＳＯＣを強化することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、分析方法の検討を担当。（担当頁特定不可能）（担当頁特定不可能） 共著者名：田中小百合、桝本妙子、堀井節子、三橋美和、徳重あつ子、福本恵
37.男性高齢者に対する足浴の転倒予防効果の検討《査読付き》	共	2010年08月	人間工学、46(4)、pp.277-281	健康な男性高齢者を対象として、足浴が転倒を予防するケアとして有効かどうかの検討を行った。同一の被験者に足浴を実施する実験（足浴実験）と足浴を実施せずに安静とする実験（対象実験）を行い、足関節背屈角度、歩行時の足底荷重最大値、歩幅の比較を行った。その結果、足浴後は足関節の背屈角度、歩行時の足底荷重最大値、歩幅が増加することが明らかとなった。今後は、転倒予防ケアとしての実用化に向けて研究を継続していく。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：本多容子、阿曽洋子、伊部亜希、田丸朋子、徳重あつ子
38.ベッドの高さの違いからみた移動援助時の患者の頚部筋負担及び看護師の作業効率への影響 《査読付き》）	共	2010年02月	人間工学、46(1)、pp.10-15	ベッドの高さの違いによる看護師の作業効率の違いが患者の頚部筋負担に及ぼす影響について、検証を行った。看護師にとっての易作業高と不易作業高の二種類の高さのベッドで、胸鎖乳突筋の積分筋電図、最大脊柱挙上角度、頚部後屈角度、援助の所要時間に有意差がみられた。これは、不易作業高での援助時、看護師役が患者役の脊柱を挙上し、患者役の頚部がより後屈し、このような姿勢が安楽

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				でないために患者役が無意識に顎を引き、頚部筋負担が増大したと考えられる。安楽でない姿勢を取る時間の延長も患者には負担であるといえる。結果、不易作業高での援助時、看護師の作業効率は低下し、患者の頚部筋負担を増加させることが明らかとなった。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：田丸朋子、阿曽洋子、伊部亜希、本多容子、木村静、鈴木みゆき、徳重あつ子
39.脳波計測に基づく仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす脳活性についての研究《査読付き》	共	2009年02月	生体医工学、47(1)、pp.15-27	仰臥位から坐位へ姿勢を変化させることが大脳を活性化させるかどうかについて、脳波計測に基づいた検証を行った。結果、脳波パワー値はヘッドアップ80度では仰臥位よりも坐位での値が有意に高かったが、30度では有意差は部分的であった。角度比較では、80度の値が30度よりも有意に高く、脳活性の持続時間は80度の方が長かった。主観調査では、仰臥位よりも坐位、30度よりも80度での覚醒度が高いとの回答が多かった。仰臥位から坐位への姿勢変化は大脳を活発化させ、その効果はベッドの挙上角度によって異なることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実験・分析方法の検討、実験実施、データ分析等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵
40.回復期脳卒中片麻痺患者の非麻痺側筋肉量と本的ADLとの関連《査読付き》	共	2009年01月	日本健康医学会雑誌、17(4)、pp.3-9	研究目的は、回復期脳卒中片麻痺患者の非麻痺側筋肉量と基本的ADLとの関連を明らかにし、ADLを維持するための非麻痺側筋肉量の意義を検討することである。bioelectrical impedance analysis（BIA）法による筋肉量の測定、Barthel Index（BI）による基本的ADLの評価を行い、その関連性を分析した。結果、非麻痺側上肢筋肉量とBIのうち、トイレ動作と排尿コントロールの各得点との間で有意な正の相関関係が認められた。また、非麻痺側下肢筋肉量とBIのうち、食事、整容、トイレ動作、排便コントロール、排尿コントロールの各得点、BI総得点との間で、有意な正の相関関係が認められた。非麻痺側筋肉量が大きいとBI得点も大きいという関係があり、特に下肢においてはその関係が強いことが明らかとなった。これより、回復期の脳卒中片麻痺患者において、非麻痺側筋肉量が増えれば、基本的ADLの維持・向上につながる可能性が考えられた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵
41.体位分散マットレスの安楽性と安全性の評価 《査読付き》	共	2007年03月	看護人間工学研究誌、7、pp.29-35	体圧分散能力の異なる4種類のマッチレス（汎用マットレス、枠無ウレタン、枠有ウレタン、エアマットレス）を設定し、安楽性をみるために寝心地評価と、安全性をみるために端坐位保持中の身体安定性の評価を行った。その結果、厚みが薄めで枠ありウレタンが寝心地の各要素で嗜好性が高く、安楽性に優れていた。また、端坐位保持中の身体安定性についても枠有ウレタンが汎用マットレスとほぼ差がなく、汎用マットレスと同等の安全性であることが示された。褥瘡のリスク保持者でベッド上での自力動作も可能な人の場合、体圧分散能力もあり、安楽性・安全性でも優れている枠有ウレタンの選択が望ましいと考えられた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田幸恵、前田知穂
42.ADLの維持と褥瘡予防を両立させるための体位分散マットレスの評価 －マットレス上での起き上がり動作時の沈み込み、筋活動量、動きやすさの観点から－ 《査読付き》	共	2007年02月	日本褥瘡学会誌、9(1)、pp.81-86	体圧分散マットレスは褥瘡発生予防に有効であるが、自力動作を阻害する危険性があるため、本研究では動きやすさの評価を行った。結果、身体の沈み込みは、エア、ウレタンフォーム、ポリエステルの順に大きく、沈み込むほど筋活動量が大きくなるという関係がみられた。このことより、体圧分散マットレス使用者で自力で動作も可能な場合は、沈み込みが小さく柔らかすぎないウレタンフォームマットレスの使用が望ましいことが示唆された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。（担当頁特定不可能）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
43.全身清拭が精神的慰安に及ぼす影響 －自律神経活動と主観調査から－ 《査読付き》	共	2005年02月	看護人間工学研究誌、6、pp.17-22	共著者名：岡みゆき、阿曽洋子、伊部亜希、徳重あつ子、片山恵、高田幸恵 生体の緊張とリラックスに関与する自律神経活動に着目し、全身清拭が精神面で患者に及ぼす影響を心拍スペクトル解析により明らかにすることを目的として研究を行った。その結果、交感神経活動、副交感神経活動ともに清拭部位による有意差は認められなかったが、全身清拭は大きなストレッサーにはならず、交感神経活動を抑制しうるケアであることが示唆された。緊張感や羞恥心をとり除いていくことが、過度に交感神経系を刺激するのを防ぎ、早い段階から副交感神経系を活性化する鍵であると考えられた。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。（担当頁特定不可能）
44.全身清拭動作における看護者の負担動作の筋電図からみた検討 －広背筋への負荷を指標として－ 《査読付き》	共	2005年02月	看護人間工学研究誌、6、pp.23-29	共著者名：山口望、阿曽洋子、矢野祐美子，伊部亜希、木村静、岡みゆき、徳重あつ子，青木千花、田中百合子、井上智子 表面筋電図を用いて、全身清拭動作における看護者の負担のある動作について検討を行った。その結果、看護者の負担は動作の対象となる清拭部位が看護者から遠い左上肢と左下肢で大きく、看護者から清拭部位までの距離が負担の要因と考えられ、作業域の検討の必要性が示唆された。また、背部清拭時は上肢を大きく動かすことが負担となっており、清拭時の姿勢にひねりが生じていることより、姿勢が看護者の負担となることが推測された。 本人担当部分：実験・分析方法の検討、実験補助等を担当。（担当頁特定不可能） 共著者名：松尾香織、阿曽洋子、矢野祐美子、伊部亜希、木村静、岡みゆき、徳重あつ子、酒井真紀、笹山貴子、井上智子
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.透析看護認定看護師が高齢透析患者へ終末期の医療とケアに関する意思確認を開始するタイミング-デルファイ法を用いた調査からの検討-	共	2024年11月	第27回日本腎不全看護学会学術集会・総会	本研究は、高齢透析患者へ終末期医療とケアに関する意思確認を開始するタイミングを明らかにすることを目的と、透析看護認定看護師を対象に調査を行った。その結果、意思確認開始が必要な21のタイミングと、そのタイミングの多くが患者の身体状態の変化や思いに関連していることが明らかとなった。この21のタイミングは、患者の状況に応じた意思確認開始の判断に活用できると考える。山中晶子、徳重あつ子 、岩﨑幸恵
2.閉じこもり傾向にある独居高齢者の思い ―閉じこもり改善に向けた支援の検討に関する一事例―	共	2024年8月	日本看護研究学会第50回学術集会（奈良）	独居高齢者の現状と思いを明らかにし、閉じこもり改善に向けた支援を検討することを目的に研究を行った。P市の地域包括支援センターが介入し、閉じこもり傾向である独居高齢者１名（A氏）に30分程度の半構造化面接を3回実施した。得られたデータは比較的小規模のデータに適応可能であるSCAT（Stepsfor Coding and Theorization）の手法を用い質的記述的に分析した。A氏は80歳代後半の女性で独居であった。軽度の認知症と高血圧症があり自宅で過ごすことが多く、医師からは自宅に閉じこもらずに外出し同世代と交流するように助言を受けていた。ストーリーラインの一部は下記である。「他者との交流に関する思い」では、＜友人との交流を避ける理由＞は、＜我慢の増加が引き起こす人間関係によるストレス＞である。「今後の生活への思い」では、＜老後の理想とする生活＞は、＜他者の手助けを受けない自宅での自立した生活＞であり、＜要介護状態への移行＞は、＜尊厳の喪失＞となる。＜サービスを拒否する理由＞は、通所介護では＜人に対する警戒心や緊張感＞が起こるためである。そのため＜心を許せる友人＞のみと交流し＜傷つくことへの回避＞を行う。以上から、サービスの導入が難しい閉じこもり高齢者の場合、他者との交流や今後の生活に対する思いを明確にすることは、具体的な支援の検討につながることが考えられた。桧山美恵子、徳重あつ子
3.Basic Verification of Nursing Care Stimulating the	共	2024年7月	35th International Nursing Research	本研究では日常のケアの中で行うことのできる手洗いに着目し、認知機能を活性化させるケアとして看護に取り入れることが可能かどうか基礎的な検証を行うことを目的として研究を行った。研究対象

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
Cognitive Function Using Handwashing for Older Adults 手洗いを用いた認知機能に刺激を与える看護ケアの基礎的検証			Congress（STTI）（シンガポール）	者は、研究に同意した、自立した生活を送る地域在住の高齢者20名（男性10名、女性10名、平均年齢73.05歳）である。健康な自立した高齢者においては、蛇口から流れる水や湯のような触覚や温度覚への刺激を伴わず、自分自身の手を擦るだけでも生体を刺激し、ワーキングメモリや気持ちにも影響があることが確認できた。Atsuko Tokushige, Megumi Katayama, Miyuki Suzuki, Yukie Iwasaki, Keiko Yokojima, Keiko Sugiura, Osamu Katayama
4.Evaluation of Reactivity to Repeated Cold Immersion in Female Nurses Prone to Cold Hands: Capillary Blood Flow and Subjective Assessment　手が冷えやすい女性看護師における反復冷浸漬に対する反応性の評価： 毛細血管血流と主観的評価	共	2024年3月	7th East Asia Forum of Nursing Scholars（EAFONS） 2024（香港）	本研究は17名の女性看護師を対象とした。実験は2023年2月と3月に、管理された恒温室内で15℃の水に手を1分間浸し、10分間隔で4回繰り返して行った。毛細血管スコープ（GOKO-Bscan、GOKOイメージングデバイス株式会社）を用いて、各冷水浸漬前後で合計5時点の測定を行った。手が冷えやすい人とそうでない人では、冷水浸漬後の毛細血管血流と主観的評価に差が認められた。手指が冷えやすい人は冷えにくい人に比べ、2回目の冷水浸漬後は手指が冷たく感じ、3回目の冷水浸漬後は手指の温熱感が低く評価された。4回目では毛細血管血流に有意差が認められた。手が冷たくなりやすい人とそうでない人では、生理的指標や主観的評価に違いが生じるのは、1回の冷水浸漬ではなく、繰り返し浸漬した場合である可能性が示唆された。Miyuki Suzuki, Miwa Mitoma, Aki Ibe, Akira Takamata, Atsuko Tokushige, Toshie Tsuchida
5.Social Network Analysis of the National Nursing Examination During the COVID-19 Pandemic (1st Report): Co-Occurrence Network Analysis　COVID-19パンデミック時の看護師国家試験の社会ネットワーク分析（第1報）： 共起ネットワーク分析	共	2024年3月	7th East Asia Forum of Nursing Scholars（EAFONS） 2024（香港）	COVID-19の流行が看護師国家試験に与えた影響を明らかにすることを目的として研究を行った。分析対象は、2020年9月～2023年3月（各年4月～8月を除く）の看護師国家試験に関するTwitterの投稿である。Python 3.8.5を用い、広告や説明など看護師国家試験との関連性が低いものを除外した上で、合計27,952件の投稿を収集した。その後、KHcoderを用いて共起ネットワーク分析を行った。ツイッター上では、感染発症中、学習環境の変化や臨床研修の休止による受験への不安の投稿が見られた。また、感染による受験の可否への不安も挙げられており、COVID-19の蔓延が各時期の不安のリスク要因として看護師国家試験と関連付けられていることが多かった。Yukie Iwasaki, TomoyaKitayama,Atsuko Tokushige
6.Social Network Analysis of the National Nursing Examination During the COVID-19 Pandemic (2nd Report): Correspondence Analysis　SNSテキスト分析からみるCOVID-19流行中の看護師国家試験（第2報）：コレスポンデンス分析	共	2024年3月	7th East Asia Forum of Nursing Scholars（EAFONS）2024（香港）	本研究では、Twitterの内容を分析し、COVID-19による看護師国家試験に関して感情面にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とした。分析対象は、2020年9月～2023年3月（各年4月～8月除く）までの、本邦の看護師国家試験に関するTwitter上での投稿である。Python3.8.5を用い、看護師国家試験との関係性が乏しいものを除外した計27,952件の投稿を収集した。PythonのML-Askを使用し、哀れ、喜び、好き、嫌、安らぎ、怒り、怖れ、恥、昂ぶり、驚きの10要素について抽出を行った。さらに、KH coderを使用してコレスポンデンス分析を行った。感情の10要素では、3年間ともに最も多く抽出された語は「怖れ」であり、次いで「嫌」、「恥」の順に多かった。3年間ともに最も少なかった語は「好き」であった。国家試験の月である2月と合格発表のある3月に最も多い語は、2020年度と2022年度は「嫌」、2021年度2月は「怖れ」、3月は「嫌」であった。コレスポンデンス分析では、2020年度は「試験」語の最も近くに配置されたのは「哀れ」、2021年度と2022年度は「怒り」であった。また、「実習」と結びついたのは、2020年度は「怖れ」、2021年度と2022年度は「安らぎ」であった。Twitter上の看護師国家試験に関する感情表出は、ネガティブなものが多かったことが示された。その中で「実習」に関してはポジティブな感情表出もあったことから、患者、グループメンバー、教員との関係性の中で前向きな気持ちになっていた可能性が考えられた。これらの結果から、看護教育においては、精神的な支援とともに、実習における体験への支援の重要性が示された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
7.点眼の失敗を軽減するための コンサルティングシステムの開発	共	2023年12月	第44回日本人間工学会九州・沖縄大会（福岡）	Atsuko Tokushige, Tomoya Kitayama,Yukie Iwasaki 看護と工学の連携における、高齢者の点眼失敗を軽減するためのコンサルティングシステムの開発を行ったので、成果を報告した。 工藤大祐、戸上英憲、徳重あつ子 、野呂影勇
8.脳卒中リハビリテーション看護認定看護師の行う退院支援の急性期・回復期における特徴と課題	共	2023年12月	第43回日本看護科学学会学術集会（山口）	【目的】脳卒中リハビリテーション看護認定看護師が行う退院支援について、急性期と回復期における特徴と課題を明らかにする。 【方法】脳卒中リハビリテーション看護認定看護師（以下 Stroke Rehabilitation Nursing Certified Nurse；SRCN）606名、近畿圏のジェネラリスト看護師531名を対象とし、郵送調査を行った。 【結果】回答者は186名、属性の記載がない者等を除外し、179（SRCN147、ジェネラリスト32）名を分析対象とした。属性比較では、急性期よりも回復期の方が経験年数が長かった（ｐ＝.003）。他部門の認定・専門看護師への連携の有無では、急性期の方が連携を行っていた（ｐ＝.021）。退院支援教育では、SRCNとジェネラリストのできていない項目は、ともに「障害受容」であった。退院支援において特にこだわって実践していることについての自由記述で、件数が多かったのは「その人らしさ」25％、「患者の希望」23％、「再発予防」19％であった。「困難感」は6％あり、「日々の業務で退院支援に繋げられない現状」などの記載を認めた。 【考察】急性期は業務の特徴から、若い年齢層が必然的に多く、病院機能分化の促進により離職率が高くなる可能性が示唆され、経験年数の短縮に繋がる可能性がある。急性期SRCNは、長く働けるような環境作りが課題である。一方で回復期は、在院日数が長く、患者のニーズの把握や退院後の生活をイメージしやすいため、病棟のみで対応が完結している可能性がある。このため回復期SRCNは、多職種と連携して患者を多角的に捉える重要さを、スタッフに伝えていく事が課題である。また退院支援教育においては、障害受容のための支援は重要なものであるため、SRCNが率先して理論を用いた看護展開や、ストレスコーピング方法の探索など実践していく必要がある。患者の希望に寄り添った看護や疾患特有の再発予防を重要と捉えて実践していることも示されたが、「困難感」からは理想と現実の中でジレンマを感じているSRCNの存在が示されたため、所属長にSRCNの専門性を明確に提示し、活動しやすい環境を意図的に作っていく必要がある。 松尾千恵美、徳重あつ子 、岩﨑幸恵
9.他者と交流を持たない独居高齢者の現状と思い―地域包括支援センターにおける看護支援の検討に関する―事例―	共	2023年9月	第54回日本看護学会学術集会（大阪）	【目的】地域包括支援センターが見守りを行っている独居高齢者の現状と思いを明らかにし、看護支援を検討することである。 【方法】A市の地域包括支援センターの看護師が見守りを行う必要があると考えるケースである独居高齢者１名（B氏）に30分の半構造化面接を1回実施した。得られたデータは比較的小規模のデータに適応可能であるSCAT（Steps for Coding and Theorization）の手法を用い質的記述的に分析した。倫理的配慮として、研究対象者に対して文書と口頭で研究の目的、意義、方法、個人情報の取り扱い、任意性を説明し同意を得た。本研究は所属施設の研究倫理委員会の承認を得て実施した。 【結果】B氏は80歳代の男性で認知症と視覚障害があり独居である。以前は畑仕事や自転車での外出ができたが、転倒を繰り返し徐々に外出できなくなった。介護度は要介護1で、訪問介護、訪問看護、訪問診療を利用していた。飲酒を好み食事摂取が難しく、栄養剤のドリンクを摂取していた。地域包括支援センターや介護支援専門員、民生委員などの職員以外との交流は乏しかった。SCAT分析の結果、「生活の実態と現在の思い」、「交流を望まない理由」というストーリー・ラインと理論記述が得られた。「生活の実態と現在の思い」の理論記述を示す。＜辛いことに対する一時的忘却方法＞として＜アルコールに依存＞する。＜今の生活から抜け出せない辛い思い＞が生じるきっかけは＜生活の張り合い＞が無いことや、＜生きがいの喪失＞によるものである。「交流を望まない理由」の理論記述を示す。＜他者からの多様な指摘＞は＜言葉にできない経験値＞

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
10.社会的活動に自ら参加している高齢者の身体・心理・社会的な特性―シルバー人材センターで活動している高齢者の語りから―	共	2023年8月	日本看護研究学会第49回学術集会（オンライン）	となり＜他者を避ける気持ち＞になる。＜理解者の存在に欠ける現状＞であるため＜孤立した生活＞となり＜上手く生きていくために身に着けた行動＞をとる。 【考察】辛い思いを受け止め心理的に支える存在になり信頼関係を構築すること、さらに身体的な悪化を防ぐために栄養状態改善の工夫や、異常の早期発見のための積極的な見守りをすることが重要であると考える。 桧山美恵子、徳重あつ子 、横田かりん、北口喜代美 【目的】シルバー人材センターで活動している高齢者の語りから、社会的活動に自ら参加している高齢者の身体・心理・社会的な特性を明らかにすることである。 【方法】P市のシルバー人材センターで活動している高齢者5名に対し、１回60分程度の半構造化面接を1回実施した。インタビュー内容は属性、他者との交流、シルバー人材センターに登録したきっかけ、生きがいや楽しみ、老いの自覚などであった。得られたデータは比較的小規模のデータに適応可能であるSCAT（Steps for Coding and Theorization）の手法を用いて質的記述的に分析した。本研究は所属施設の研究倫理委員会の承認を得て実施した。 【結果・考察】5名の（マイナス3文字）平均年齢は73.2±3.5歳、平均インタビュー時間は68分であった。シルバー人材センター就労での生活、老いのとらえ方、健康維持の方法などのストーリー・ライン、理論記述が示された。理論記述から身体・心理・社会的内容を抽出し考察した。 身体的な特性として5名ともに2～3の疾患を有していたが、内科系の疾患が多く活動には支障がなかった。さらに「＜将来健康で過ごしていけるような対策＞は、＜筋肉を作るための食事療法＞である」という理論記述から、日常の生活から意識して身体機能の維持のために積極的に行動していたことが明らかとなった。心理的な特性として「＜介護業務＞を通して、＜自己の将来像＞を考えるための＜規範となる超高齢者の存在＞を見つけることができる」という理論記述から、5名中4名がロールモデルとなるような年長者との出会いを通して、意図的にその人の考えや行動を取り入れて生活していた。さらに「＜老いの捉え方＞は＜いつか来る死への受容＞が基本である」、「＜健康であり続けたい願い＞は＜避けたい寝たきり＞である」という理論記述から、老いを受容し健康に対する意識の高さがあることが示された。社会的な特性として対象者は家族からの支援が得られる環境であることなど生活基盤が安定していた。さらに「シルバー人材センターでの＜最初の目的＞は＜人間関係継続のための就労＞である」という理論記述から、自ら積極的に人とのつながりを求め行動できる人たちであることが示唆された。
11.Report on a Dementia Prevention Workshop Organized through Multidiscipline Intervention：An Examination of Intervention Approach through the Evaluation of Group Reminiscence Method and Mental Aspect　多分野介入による認知症予防教室の取り組みについての報告 －グループ回想法と精神的側面	共	2023年6月	2023 IPA International Congress　（リスボン）	桧山美恵子、徳重あつ子 認知症予防法の開発を目的として、大学の複数分野の研究者が協力して地域住民を対象に教室を行ったため報告する。関わった分野は、心理学、健康・スポーツ学、食物栄養学、音楽、看護学の5つである。その中で、精神面の評価と看護学分野で行ったグループ回想法の結果から、今後の介入方法について検討を試みた。グループ回想法のセッション前後の単発評価では、覚醒度が上がり知的な活動との関連も示されたが、教室の開催期間を通しての評価では、精神側面の得点の低下、うつ傾向の人が存在していることから、精神面へのアプローチの強化が必要であることが示された。COVID－19の影響も視野に入れて介入計画を立てていくこととする。 Atsuko Tokushige,Kanji Watanabe,Tetsuhiko Sakata,Yasuko Fukuda,Naoto Otaki,Tomoko Ichinose,Keisuke Fukuo

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
の評価からの介入方法の検討－				
12.西宮市保健所における COVID-19 対応の検証 2 報－第 4 波での病床逼迫下の 自宅療養者支援－	共	2021年12月	第 80 回日本公衆衛生学会総会抄録集、p.511	稲田 綾子、後藤 眞理、藤原 万貴、久保田 朝幸、小田 照美、和泉 京子、徳重あつ子 、金谷志子、寶田 穂、福田 典子
13.西宮市保健所における COVID-19 対応の検証 1 報 －第 1 ～ 4 波の感染動向と保健所対応	共	2021年12月	第 80 回日本公衆衛生学会総会抄録集、p.511	後藤 眞理、稲田 綾子、藤原 万貴、久保田 朝幸、小田 照美、金谷志子、徳重あつ子 、和泉 京子、寶田 穂、福田 典子
14.介護付き有 料老人ホーム入居中の認知症高齢者に対するコミュニケーションロボット活用の効果	共	2021年11月	第 52 回日本看護学会学術集会、p.309、2021.11	横島 啓子、杉浦 圭子、徳重あつ子 、久山 かおる、後藤 雪絵、鷹嘴 亜里、山下 巌
15.高齢維持血液透 析患者に関わる看護師の倫理的問題と対処の実態	共	2021年11月	第 24 回日本腎不全看護学会学術集会・総会、p.37	武田（山中） 昌子、徳重あつ子 、岩﨑 幸恵、杉浦 圭子、山本 久代、小柴 隆史
16.高齢摂食嚥下障害者の退院後の生活における介護者の困り 事からみた継続看護の必要性	共	2021年8月	、第 26・27 回合同学術集会　日本摂食嚥下リハビリテーション学会（JSDR2021）、p.414	永野 彩乃、徳重あつ子 、岩﨑 幸恵
17.もの忘れ外来に受診同行する 介護者の介護負担の実態	共	2021年4月	日本認知症ケア学会誌、20（1）、p.106	ブーマン栗山 珠枝、千家浩美、徳重あつ子 、岩﨑 幸恵、大饗 義仁
18.閉じこもり高齢者を介護サービスにつなげるための支援―地域包括支援センターの看護師による地域への介入―	共	2021年3月	日本看護研究学会　第34回近畿・北陸地方会学術集会	桧山美恵子、徳重あつ子 、横島啓子
19.高齢者の点眼失敗に着目した椅子の背もたれ使用の効果についての検証	共	2020年11月	第41回バイオメカニズム学会　学術集会（Web発表）	高齢者が点眼薬を的確に投薬するための点眼姿勢として、椅子の背もたれの使用と点眼の成否における効果についての検証を目的として研究を行った。20名の研究参加があったが、点眼の成否判定が困難であった者と明らかに関節の捻りを加えた点眼方法の者は除外とし、17名、合計51試行事例を分析対象とした。その結果、背もたれの使用の有無と点眼の成否の比較では有意な差は認められなかったが、背もたれの使用の有無と頚部伸展角度、腰部伸展角度、点眼容器角度の比較において、背もたれ有り群と比較して背もたれ無し群で頚部伸展、腰部伸展、点眼容器角度が有意に小さかった。また、背もたれ無し群内での頚部伸展角度と点眼の成否の比較において、失敗事例は有意に頚部伸展角度が小さかった。滴下の位置ずれの有無と頚部伸展角度の比較においては、背もたれ無し群内の位置ずれ有りで頚部伸展角度が有意に小さかった。これらのことから、背もたれ無しでは、失敗事例で有意に頚部伸展角度が小さく、点眼容器先端との接触による失敗リスクがあり、背もたれを使用すると点眼時に腰部が伸展することで頚部が伸展しやすく、更には点眼容器と眼が水平になりやすいと考えられ、点眼時における点眼容器先端との接触によるの失敗リスク軽減が望めることが考えられた。 工藤 大祐、徳重あつ子、片山 恵、岩﨑 幸恵
20.大学看護学部「まちの保健室」の利用状況および評価	共	2020年11月	第51回日本看護学会－ヘルスプロモーション－学術	子どもから高齢者まで幅広い年齢層を対象とした地域住民の心身の健康の維持・向上、生活習慣病の予防などの相談の場、介護・子育てなどの様々な不安や悩みに対して、気軽に話ができる場を提供す

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
			集会、p.70 （Web発表）	るため、概ね月 1 回「まちの保健室」を実施している。そこで、より充実した活動を行うため、参加者の意見を聴く必要があると考えた。そこで、「まちの保健室」の利用状況および評価を明らかにすることを目的として研究を行った。 「まちの保健室」参加者 218 名を対象とし、参加後に無記名自記式質問票を配布し、会場に設置したアンケート回収箱にて回収を行った。その結果、153 名から回答を得た（回収率 70.2%）。男性 24.2%、女性 75.8%で、65 歳以上は 70.6%であった。利用状況について、参加は初めてが 46.4%、2 回以上が 53.6%であり、参加目的（複数回答）は健康指標の測定が 85.6%、血圧測定が 53.6%、健康相談が 26.8%であった。評価としては、気軽に立ち寄ることができたが 97.3%、気軽に相談できたが 98.0%、相談は役に立つと思うが 98.7%、健康状態を知ることができたが97.8%、健康づくりに活かせる内容だったが 97.0%であった。健康相談は 100.0%、健康指標の測定は 97.1%が満足と回答していた。今後も参加したいは 90.1%、家族や友人、知人へ紹介したいは 75.4%であった。以上のことから、「まちの保健室」への参加により、地域住民の健康意識が維持および向上する可能性が示唆された。 松井 菜摘、阪上 由美、新田 紀枝、田野 晴子、桧山 美恵子、和泉 京子、寳田 穂、徳重あつ子、宮嶋 正子、久山 かおる、早川 りか、谷澤 陽子、阿曽 洋子
21.認知症末期患者の代理意思決定を行う家族への看護師の支援方法－看護師の関わり方について－	共	2020年11月	第51回日本看護学会－看護管理－学術集会、p.359 （Web発表）	慢性期病院では多数の認知症末期高齢者が入院し、医師から説明をうけ今後どのような治療を希望するかを、家族が決めなければならない場面が多くなってきた。このため、看護師がどのような関り方をしているのかの支援方法を明らかにすることを目的として研究を行った。S 市にある慢性期病院に勤務する代理意思決定支援を行ったことのある看護師 12 名を対象として意思決定支援を行う際にどのように関わっているかについてインタビューを行った。その結果、支援回数により違いがあることが示された。支援回数が少ない看護師は多職種から情報を得たり、医師との橋渡しを行う役割をしており、自分で判断することを不安に感じていた。一方、支援回数の多い看護師は、対象者の理解のみでなく家族がどのような思いを持っているかをアセスメントし、家族に応じて説明の仕方を考え納得が得られるまで面会のたびに話を行っていた。 源野 幸世、徳重あつ子、横島 啓子
22.介護老人保健施設に入所されていた高齢者の家族が語る看取りへの思い	共	2020年11月	第51回日本看護学会－ヘルスプロモーション－学術集会、p.158 （Web発表）	老健に入所されていた高齢者の家族が語る看取りへの思いを明らかにし、本人や家族の気持ちに寄り添った、悔いの残らない看取りにするための看護実践への示唆を得ることを目的として研究を行った。H 県内の中核市にある老健で過ごし施設内と他施設で看取られた入所者の家族、各々3 名計 6名を対象に看取りへの思いを半構成的面接法にて収集し質的帰納的に分析した。その結果、41 コードと 20 サブカテゴリーを抽出し、更に 10 カテゴリーから4コアカテゴリーを生成した。その結果、老健での看取り支援では「スタッフの繁忙による諦念」が起こらずに、強みである看護師の 24 時間体制や常在医師のいる「安心できる環境」を整えられるよう、スタッフの看取りケア技術の習得と教育の充実が必要であると考えられた。 また、家族は《かけがえのない存在としての入所者への思い》を持っていることが示され、段階を踏んで死を受容することが《辛いこともあったが精一杯やり遂げた達成感》に繋がることが示唆されたため、家族と入所者の強い絆を理解して気持ちに寄り添いながら、段階的に関わることが 重要であると考えられた。 千家 浩美、徳重あつ子、杉浦 圭子、横島 啓子、ブーマン栗山 珠

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
23.地域在住独居高齢者における独自志向性と心理社会的関連要因の検討	共	2020年9月	日本看護研究学会雑誌、43（３）p.495 （Web発表）	枝 本邦の65歳以上の高齢者のうち約2割は独居であり、増加傾向にある。独居高齢者を社会的孤立の状態や孤独死に至らしめないための対策は喫緊の課題であるとされているが、高齢者のうち自らあえて積極的には地域交流を行わない「確信的閉じこもり」の存在も指摘され、地域での介護予防事業への参加が乏しいことも報告されている。そこで本研究では、独居高齢者の独自志向性に着目し、その傾向と心理社会的因子との関連を検討することを目的とした。2017年11月に兵庫県の大規模集合住宅に居住する独居高齢者944人に対し、郵送による無記名自記式質問紙調査を行った。304件（回収率33%）が回収され、294件を分析対象とした。調査項目は基本属性と独自志向性（5項目、5件法）のほかに身体心理的要因としての BADL、IADL、UCLA、孤独感、社会的要因としての Supportive Network Scale等である。その結果、対象の平均年齢は77.3±6.2歳（range65-93）で、約7割が女性だった。独自志向性は男性の方が高く、 年代が上がるほど志向性は低くなっていた。また、独自志向性が高いものは、外出頻度が週1回未満のものが多かった。独自志向性の項目のうち特に「他の人と話すことを楽しむ」ことより「一人で考えることが楽しい」 と回答したものは、IADL の自立度が低く、孤独感を感じ、介護や日常生活、健康上や金銭上の困りごとのサポートがないと回答していた。これらのことから、独自志向性の高さは外出頻度が低下させ、特に皆と話すより、一人で考えることが楽しいと感じるタイプの高齢者は、孤独感を高め、IADL 低下を引き起こしやすい可能性が示唆された。今後心身状況が悪化した場合に必要なサポートも得られにくい状況が明らかになっ たことから独自志向性の高い高齢者に見合った支援内容の検討が必要であると考えられる。
24.サービス付き高齢者住宅入居中のMCI高齢者に対するコミュニケーションロボットを用いた認知機能の検討	共	2020年9月	日本看護研究学会雑誌、43（３）p.494 （Web発表）	杉浦 圭子、横島 啓子、<u>徳重あつ子</u> 日本の高齢化率は28.4%（2019）であり、65歳以上の1人暮らしの高齢者の割合は17.7% である。さらに、認知症と MCIの人口は862万人と推計されており、1人暮らしの認知症高齢者への支援は日本の課題である。今回、サービス付き高齢者住宅入居中の MCI 高齢者に対し、コミュニケーションロボット活用後の認知機能について検討した。MCI 高齢者2名（80代、女性）にロボットを用いて、①生活リズムに応じた声掛け ②前，午後に3曲歌う ③クイズ（午前） ④運動（午後）をプログラムし、対象者の居室に1週間設置した。認知機能の評価は、ロボット使用前後に①MMSE，FAB ②LED 反応計測システムのランダムボタン押し60回達成課題及び記憶誘導順序課題（2×5課題）により行った。その結果、認知機能テストの上昇が認められた。生活リズムに応じたロボットとの会話やレクレーションプログラムを設定することで、MCI 高齢者の生活にメリハリができ、ロボットの問いかけを注視したり話しかけることが、認知機能検査値の向上に影響したと考えられる。しかし、Go/No Go の結果から、ロボットを用いた介入でも反射的な行動を抑制する機能の向上は得られにくいことが明らかになった。
25.回想を引き出すための認知症高齢者との会話の検討	共	2020年9月	日本看護研究学会雑誌、43（３）、p.501 （Web発表）	横島 啓子、杉浦 圭子、<u>徳重あつ子</u>、久山 かおる 回想法は認知症高齢者における非薬物療法として位置付けられているが、実践報告の数はまだ少ない。このため本研究は、回想法を用いた認知症高齢者との会話の実態から、看護ケアとして認知症高齢者の回想を引き出す会話の方法についての示唆を得ることを目的として行った。倫理審査委員会承認後に対象者本人と身元引受者より同意を得て、介護老人福祉施設入居者4名を対象として個人回想法を行った。回想法は、夕食後から就 寝準備前までのくつろぎの時間帯に、1回20分程度を週2回、1カ月間実施した。回想に用いたものは、戦前・戦後の動画や写真を表示で

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				きる「対話ではじめるパソコン回想法（エヌ・プログレス社）」、昭和20～40年代 の写真が掲載されている「昭和の暮らしで写真回想法（農文協）」、お手玉、メンコである。研究者は、対象者の生活背景などの情報は得ずに、これらのツールを用いて会話を行った。分析は、対象者のクローズド型の反応のみのものを除外し、回想に至った会話の検討を行った。その結果、日常生活自立度がⅢ a やⅣの認知症高齢者でも、「はい」「いいえ」ばかりではなく、昔のことを思い出しながらの語りの確認ができたことから、回想を引き出すための会話としての「個人回想法」の有効性が示された。また、対象者の背景を知らなくても回想を引き出すことができたことから、ツールの利用は効果的であると考える。 徳重あつ子、横島 啓子、杉浦 圭子、岩﨑 幸恵、 桧山 美恵子
26.Social and Psychological Factors Associated to Preference of Solitude for Older Adults Living Alone in Japan	共	2020年9月	International Nursing Conference2020, https://www.twinc2020.tw/ Abstract Book V3 (2), p.1819 （台湾）	日本においては、一人暮らしの高齢者の社会的な孤立と孤独死が問題となっているため、関連する社会的および心理的要因を調査することを目的として郵送による調査研究を行った。その結果、独自嗜好性の総得点が高かった人は、他の人と話すことを楽しむよりも一人で考えることを好み、IADLスコアが低く、孤独感が高く、介護、家事、健康および経済問題に関する相談のサポートがなかった。 Keiko Sugiura, Keiko Yokojima, Atsuko Tokushige , Mieko Hiyama, Yukie Iwasaki
27.Utilization Effects of Communication Robot for Elderly Persons With Mild Cognitive Impairment (MCI) Living Alone	共	2020年9月	International Nursing Conference2020, https://www.twinc2020.tw/ Abstract Book V3 (2), p.1493 （台湾）	日本では認知症および軽度認知障害（MCI）は約862万人であり、一人暮らしの認知症高齢者支援が課題となっていることから、MCIの高齢者に対するコミュニケーションロボットの利用効果の検討を行った。その結果、MCIの高齢者の生活は、生活リズムに合わせた会話を通じて変化が大きく、コミュニケーションロボットによる注意や会話をしながらのレクリエーションプログラムの設定が認知機能を活性化しているのではないかと考えられた。 Keiko Yokojima, Keiko Sugiura,Atsuko Tokushige , Kaoru Kuyama
28.Relationships Between the Usage for ICT Device and the Psychological and Physical Status for Older Adults Living Alone in Japan	共	2019年01月	22nd East Asian Forum for Nursing Scholars (EAFONS)2019, Singapore, Abstract Book Poster Presentation for Day1,pp.80 （シンガポール）	1人暮らしの高齢者のICTデバイスの利用と心身の健康状態の関係性を明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、ICTデバイスを使用しなかった高齢者では、ICT装置を使用している高齢者よりも、基本的なADL / IADLおよび自己評価健康が有意に低かった。 Keiko Sugiura,Keiko Yokojima, Atsuko Tokushige
29.独高齢者に対するコミュニケーションロボットを用いたライフログの効果	共	2018年09月	第49回日本看護学会 ヘルスプロモーション、岡山、抄録集p.101 （岡山）	日中の行動をロボットの問いかけに応じてロボットに話しかけ、その内容を記録することが、認知機能に影響を与えるかを検討を行った。その結果、コミュニケーションロボットを用いて日中の行動を意識することで、独居高齢者の認知機能を活性化できることが示唆された。 横島啓子、杉浦圭子、徳重あつ子、久山かおる
30.高齢者施設の生活場面での危険予測にいたる看護学生の気づき	共	2018年08月	第28回日本看護教育学会学術集会、横浜、抄録集p.138 （横浜）	医療安全教育において、危険予知につながる気づきを育むことは重要である。本研究では、看護学生が高齢者施設での危険予知でどのような気づさから予測を行ったのかを明らかにすることを目的とした。その結果、高齢者施設の生活場面での危険予測にいたる看護学生の気づきでは、転倒転落の危険性を最も多く予測し、介助を受ける高齢者の【生活行動】の動きよげも【環境】や【活動を支える道具】に気づさがあった。＜車椅子＞と関連して＜立ち上がる＞や＜ブレーキ＞への気づさがあり、臨地実習での実践経験から観察の必要性を学んだことが反映していた。高齢者の姿勢や体格などの身体

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				的 な特徴に関する記述は少なく、危険予測をより個別的に行うための課題と言える。
31.地域包括支援センターの看護師による閉じこもり高齢者への介入内容	共	2018年07月	第49回日本看護学会 在宅看護、佐賀、抄録集p105 （佐賀）	小川宣子、徳重あつ子 閉じこもり高齢者が何らかの支援の利用に至ったプロセスを明らかにするために、看護師がどのような介入を行ったか検討することを目的として研究を行った。その結果、地域包括支援センターの看護師は、①定期的に訪問し、対象者のニーズをつかみ信頼関係を形成し、②看護師としての知識や技術を活用しながら、心身の状態から必要なサービスを提案し、継続した関係性への支援を行うことで、閉じこもり高齢者がサービスを含めた支援を受けることができるように介入していた。
32.高齢者に対する視覚運動系学習課題と認知機能評価テストとの関連性の検討	共	2018年06月	日本老年看護学会第23回学術集会、久留米、抄録集p.166 （久留米）	桧山美恵子、横島啓子、徳重あつ子 本研究では、認知障害の評価の一つである視覚運動系学習課題検査と一般性の高い認知機能評価テストとの関連性の検討から、視覚運動系学習課題の有用性を考察することを目的とし、高齢者71名に対して、視覚運動系学習課題およびMMSE、FABをおこなった。randomの平均施行時間は170,200ms、2×5課題は263,438msであった。2種類の課題とMMSE、FABとは有意な相関関係がみられた（相関係数：-.28～-.46）。2課題を独立変数としたROC曲線のAUCはrandomとFABの組み合わせが最も高く.643だった。2×5課題ではMMSE、FABともに感度が低く約50％程度であった。
33.感染管理認定看護師（CNIC）の業務の現状と課題－郵送調査による検討から－	共	2018年02月	第33回日本環境感染学会学術集会、東京、CD-ROM （東京）	杉浦圭子、横島啓子、久山かおる、徳重あつ子、岩﨑 幸恵 病院に所属するCNICの高齢患者と家族の指導上の課題および業務全般の課題を明らかにすることを目的として研究を行った。 その結果、高齢患者と家族に対しては、入院中から退院調整を視野に訪問看護等との連携体制作りが必要と考えられた。業務全般については、CNICの実践技術の核であるサーベイランスを行うための支援の必要性が明らかとなった。また、共通の課題として、スタッフ教育や職員の意識改革があったことから、CNICが教育を実践しやすい職場の体制作りが必要であることが考えられた。また、CNICが課題として上位にあげている患者介入については、関係者の意識や職場の体制などを含め、今後の検討課題であると考える。
34.Change in Images on Elderly Persons After Four-Year Nursing Education: Comparison with Students of Other Faculties （4年間の看護学教育後の高齢者イメージの変化：他学部学生との比較）	共	2018年01月	21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences, Seoul,p.890 （ソウル）	嶌ひかり、 徳重あつ子、横島啓子 看護学生の高齢者観について入学時から4年次まで縦断的に調査を行い、老年看護学の教育内容を検討することを目的とした。理工学部、経済学部の学生との比較を行ったところ、高齢者観については看護学部の学生有意にポジティブであった。しかしながら、エイジズムについては、他学部との差はなかったため、教育の必要性が示唆された。 Atsuko Tokushige, Kyoko Kimbara, Noriko Ogawa
35.Consideration of geriatric nursing education from the viewpoint of people’s impression of Older Adults （高齢者イメージから考え	共	2017年10月	Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing’s 44th Biennial Convention, Indianapolis,	研究者の所属する大学の学生を対象に、入学時から卒業直前までを通して、エイジズム、高齢者観、高齢者に抱くイメージを調査し、老年看護学の教育内容を検討するための基礎資料を得ることを目的として研究を行なった。 高齢者観では、1年次について、同居経験のある学生の肯定項目の一致率が、同居経験のない学生よりも有意に高かった（p=0.003）。 学生と同居している祖父母は入院や施設に入居していない状態で

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
る老年看護学教育）			https://stti.confex.com/stti/bcl7/webprogram/Paper87356.html（インディアナポリス）	あるため、比較的元気な高齢者が多いと考えられる。このことから、入学時点では同居経験のない学生との差が生じたと考えられる。実習で疾患を持つ高齢患者と接することによって、同居経験の有無による差が小さくなったと考えられるため、同居経験のある学生には、特に実習において急激なネガティブなイメージ変化が起こらないような教育の工夫が必要であると考える。
36.高齢患者と家族に対する感染予防のための指導の現状と課題－感染管理認定看護師への実態調査から－	共	2017年08月	第43回日本看護研究学会、東海、抄録集p.281（東海）	Atsuko Tokushige, Kyoko Kimbara, Noriko Ogawa 感染管理対策の活動と役割を中心的に担っている感染管理認定看護師（Certified Nurse in Infection Control：以下CNIC）に着目し、高齢患者とその家族に対する感染予防と管理の指導に関するCNICへの調査を行ない、その現状と課題について明らかにすることを目的として研究を行なった。高齢患者と家族に対する感染予防の直接的な指導は「できている」「少しできている」の回答を合わせてそれぞれ30%程度であった。高齢患者とその家族に対する感染予防と管理の困っていることとして「マンパワー不足」が多く、CNIC自身が考えている課題として「在宅・施設・地域への取り組み」が多かった。
37.看護学生の高齢者観から考える老年看護学教育－入学時と卒業時の高齢者観・イメージの比較から－	共	2017年06月	第22回日本老年看護学会、名古屋、抄録集p.177（名古屋）	嶌ひかり、徳重あつ子、横島啓子、梅澤路絵 看護学生の高齢者観について入学時から4年次まで縦断的に調査を行い、老年看護学の教育内容を検討することを目的とした。高齢者観スケールでは、4年次生で有意に肯定項目との一致率が高かった。形容詞対によるイメージでは、統計的な有意差は認められなかったが、学年が進行するにつれて、「病気がち」「遅い」等のネガティブな方向に点数が推移していた。自由記述については、ポジティブな面では、入学時は高齢者を「アクティブな存在」、卒業前では「やさしい存在」としてとらえる記述が多かった。ネガティブな面では、入学時は「難聴」や「身体機能の低下」等の一次老化、卒業前では「疾患を持つ存在」としての記述が多かった。実習でネガティブなイメージ変化を急激に起こさないよう、低学年より様々な健康レベルの高齢者についての理解が深まるような内容を授業に取り入れることが必要であると考えられた。
38.在宅における感染予防管理に関する研究の動向－2007年～2014年の国内文献から看護に焦点をあてて－	共	2017年02月	第32回日本環境感染学会学術集会、神戸、抄録集p.502（神戸）	徳重あつ子、金原京子、小川宣子 在宅における感染予防管理に関する研究の動向を看護に焦点をあてて明らかにすることとした。その結果、論文件数は1年あたり1～8件で2009年が最も多く、研究対象は「療養者」、データ収集方法は「質問紙調査によるデータ収集」が多かった。研究内容は「感染管理の基礎的技術」「医療処置における感染管理」「組織的に行う感染管理」が多い傾向であった。質問紙による実態調査の研究が多く、今後は対象やデータ収集方法を拡大していくことの必要性が示唆された。
39.Basic Research of Reminiscence Therapy in Nursing Measured by Near Infrared Spectroscopy (NIRS)（NIRS測定による看護に活かす回想法の基礎的研究）	単	2016年07月	Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing's 27th International Nursing Research Congress, CAPE TOWN, https://stti.confex.com/stti/congrs16/webprogram/Paper79481.html（ケープタウン）	嶌ひかり、徳重あつ子、横島啓子、久山かおる 本研究では、光イメージング脳機能測定装置を用いた評価を行い、大脳を刺激する看護ケアとして活用が可能かどうか基礎的な検証を行うことを目的とした。その結果、左右の脳活動に差が認められなかったことから、回想は前頭葉全体を使用することが示された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
40. Impressions Held by College Students of the Elderly - Comparison of Nursing Faculty and other Undergraduate Students（大学生が高齢者に持つイメージ―看護学部生と他学部生との比較―）	共	2016年03月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Chiba, Abstract Book Poster Presentation pp. 331-332 （千葉）	看護学部、経済学部、理工学部生命科学科、理工学部電気電子工学科の入学直後の学生に対して、エイジズム、高齢者観、高齢者に抱くイメージを調査し、老年看護学の教育内容を検討するための基礎資料を得ることを目的とした。その結果、高齢者の理解度は他学部の学生と同じであり、医学的な知識と共にエイジズム等の意識への教育も必要であることが示された。 Atsuko Tokushige, Chika Nanayama, Kyoko Kinbara, Yukiko Akai
41. Sexual Awareness and Education of High School Students （高校生の性意識と性教育について）	共	2016年03月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), Chiba, Abstract Book Poster Presentation pp. 695-696 （千葉）	高校生の性に対する意識を学年別に調査し、性教育への示唆を得たので報告する。男女で比較を行ったところ、男子の性意識は肯定的かつ多面的であるが、女子は否定的であったため、性教育は性差を考え、肯定感のもてる働きかけが必要である。 Yukiko Akai,,Atuko Nakashima, ,Mariko Tazimal, Masako Miyamoto,Midori Nagusa,Chizuko Yamamoto, Kyoko Hosako,Atuko Tokushige,Izumi Takenaka,Kiyoko Sakaguti
42. 看護に取り入れる回想法の基礎的研究	単	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会、広島、講演集p. 306 （広島）	認知症の高齢者に対して個人回想法を用いた介入を実施し、光イメージング脳機能淑l定装置を用いた評価を行い、認知症を改善する看護ケアとして活用が可能かどうか検証を行うことを目的とした。回想画像、対照画像、回想画像を用いた会話では、会話において前頭葉の活性化が認められた。また、主観調査の結果からも、回想を行うことによって覚醒度が上がったことが示された。
43. Basic Verification to Adopt Colors for the Nursing Care （看護ケアに取り入れる色彩についての基礎的検証）	単	2015年07月	Sigma Theta Tau International's 26th International Nursing Research Congress, Puerto Rico, https://sigma.nursingrepository.org/handle/10755/601770 （プエルト・リコ）	看護を行う環境の中に取り入れた色彩が、前頭葉活動と主観的覚醒度に与える影響について近赤外分光法を用いて基礎的な検証を行った。その結果、簡便に使用できるテーブルクロスによる色彩刺激によって、前頭葉が活性化することが確認できた。
44. 前頭葉活性からみた看護ケアに取り入れる色彩刺激の基礎的検証	単	2014年09月	第22回日本人間工学会　看護人間工学部会　総会・研究発表会、大阪看護人間工学研究誌、15、p.58 （大阪）	看護を行う環境の中に取り入れた色彩が、前頭葉活動と主観的覚醒度に与える影響と嗜好との関連性について近赤外分光法を用いて基礎的な検証を行った。看護を行う環境の中で取り入れることを考慮し、5色（赤、青、黄、緑、白）のテーブルクロスの色彩の違いによる検証を行うこととした。その結果、一番覚醒度が高いと回答した色、好きな色、嫌いな色については、安静開眼時と安静閉眼時共に、色彩刺激時との比較では、有意な値の増加が認められた。主観調査では、一番覚醒した色と好き又は嫌いな色との一致率は80％であり、色彩の嗜好と大脳活性との間には関連があることが示された。
45. Home Visit Nurse's Thoughts for Complementary and Alternative Medicine (CAM) in Japan	単	2014年07月	Sigma Theta Tau International's 25th International Nursing Research Congress, HongKong,https://sigma.nursingrepositor	本研究では、日本の訪問看護における補完代替療法 (CAM)の実施について調査研究を行った。補完代替療法を実施していない訪問看護ステーションの実施できない理由について、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。同時に、CAMを実施しているベテランの訪問看護師1名にCAM実施についての思いを語ってもらったものの分析も行った。その結果、CAMを実施していない訪問看護ステーションの理由として【知識】【時間】【技術】の不足が挙げられ、ステーションのスタッフの理解や、ステーションの運営母体の理解を得ることの難しさ等の点も抽出できた。また、ベテランの訪問看護師の

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
			y.org/handle/10755/335465（香港）	語りからは、実施者も癒されながら行っていることや、患者の喜びが実施のモチベーションになっていることがわかった。
46.低学年看護学生における高齢者理解の現状から考える老年看護学教育		2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会、大阪、講演集p.548（大阪）	本学の低学年の学生を対象に、エイジズム、高齢者観、高齢者に抱くイメージを調査し、老年看護学の教育内容を検討するための基礎資料を得ることを目的として研究を行った。研究対象は、入学直後の1年生と、高齢者看護学の講義受講前の2年生である。その結果、1年生と2年生では、高齢者の知識や抱くイメージには差がないことが示された。このことより、高齢者に関する知識やイメージは、日常の学生生活では養うことが難しいことが推測されたため、老年看護学の講義や演習では、偏見のない具体的なイメージが持てるような内容を計画的に取り入れていくことの必要性が示唆された。
47.排尿障害を有する回復期脳卒中患者における行動療法実施の関連要因の検討	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会、大阪、講演集p.403（大阪）	徳重あつ子、板倉勲子、七山知佳 排尿障害を有する回復期脳卒中患者における行動療法実施状況を明らかにし、実施に関連する要因を検討することを目的として研究を行った。リハビリテーション科を有し、リハビリテーション（脳血管）のある近畿圏の病院のうち、事前に郵送許可が得られた病院を対象とした。調査票の回収率は75.7％であった。行動療法は76.2％の病棟で実施されていたが、病棟の種類によって実施室は異なり、排尿障害を有する回復期脳卒中患者の誰でもが行動療法を受ける機会がるとは限らないことがわかった。また、排尿援助への関心の重要性も示された。
48.Verification of the stimulation to the hand in the elderly with dementia living in a Long-Term Care Health Facility using an electroencephalogram （脳波を用いた老人保健医療施設入居中の認知症高齢者における手指刺激の検証）	単	2013年10月	16th International Congress of the International Psychogeriatric Association, Korea（韓国）	鈴木みゆき、竹田千佐子、徳重あつ子 熱湯と熱布による手指への刺激による大脳活性について、認知症のレベルの違いで差があるかどうか検討を行った。対象者は老人保健施設入居高齢者13名（平均年齢86.5±10.5）である。脳波データを、大脳活性の測定指標とした。認知症の対象者では、温湯使用で右脳の活性化が認められた。認知症のない人には左右差は認められなかった。高齢者においては、脳機能は右半球が低下すると言われている。本研究の結果から、脳活性という点においては、熱布よりも熱湯を使用した手洗いが効果的であることが示唆された。
49.The Suggestion of Preprandial Hand Stimulation Care to Cerebral Activity of Elderly （大脳活性のための食前手洗いの提唱）	単	2013年10月	9th International Nursing Conference 2013 & 3rd World Academy of Nursing Science, Korea（韓国）	熱湯と熱布による手指への刺激による大脳活性について、成人と高齢者で差があるかどうか検討を行った。対象者は、健康成人16名（平均年齢21.0±0.7）と老人保健施設入居高齢者13名（平均年齢86.5±10.5）である。脳波データを、大脳活性の測定指標とした。熱布刺激ではα帯域成分、温湯ではβ帯域成分が高齢者では増加し、成人との比較で有意差が認められた。
50.HIV/AIDS啓発活動に参加した看護実習生へのピアエデュケーション効果		2013年03月	日本看護研究学会第26回近畿・北陸地方会学術集会、和歌山（和歌山）	地域看護学実習の一環として、保健所保健師とともにHIV/AIDSの啓発活動を行うこととなった。看護実習生として啓発活動の体験からどのようなことを感じたのかを明らかにすることを目的とし、実習生と同世代の対象に啓発活動を行った効果を検討した。結果より、学生は啓発活動を行うことの意義について学びを得ていたことが示された。また、学生自身のもつ力を自ら体感できたことで、啓発活動におけるピアエデュケーションの重要性を理解したと考えられた。
51.訪問看護師からみた	共	2012年12月	第32回日本看護科	松川泰子、田中小百合、徳重あつ子 家族介護者における補完代替療法（CAM）の実施について、訪問看護

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
家族介護者自身の補完代替療法の利用状況			学学会学術集会、東京、講演集p.370（東京）	師を対象に実態調査を行った。全国のステーションの約30％（1,700施設）を無作為抽出し、質問紙の郵送調査を行った。介護者自身のCAMの利用は、訪問看護利用者の1割程度であった。がん、難病の利用者を介護する家族の利用が多く、マッサージ、健康補助食品、食事療法の利用が多くみられた。CAMの利用目的では、疲労回復、健康の保持増進、精神安定が多く、77.8％がCAMの効果を得ているとの回答であった。この結果は、介護者の保健行動をとらえる参考になると考えられる。 共同発表者：田中小百合、徳重あつ子
52.訪問看護における補完代替療法実施の実態調査	共	2012年12月	第32回日本看護科学学会学術集会、東京、講演集p.370（東京）	訪問看護における補完代替療法（CAM）の実施について実態調査を行い、CAM普及のための示唆を得ることを目的とした。全国のステーションの約30％（1,700施設）を無作為抽出し、質問紙の郵送調査を行った。CAMを実施していない施設スタッフの興味と将来の実施可能性との関係についてＸ2独立性の検定を行ったところ、p＝0.000で有意な関連が認められた。CAMの普及には、知識や技術の向上のための機会の提供や、スタッフの興味への働きかけが必要であると考えられた。 共同発表者：徳重あつ子、田中小百合
53.Verification of the stimulation to the hand before a meal in the elderly living in a Long-Term Care Health Facility using an electroencephalogram.　（脳波を用いた老人保健施設入居高齢者における食事前の手指刺激の検証）	単	2012年09月	International Psychogeriatric Association International Meeting 2012, Cairns（オーストラリア）	熱湯と熱布による手指への刺激による大脳活性について、認知症の有無とADLの違いについて差があるかどうか検討を行った。対象者は老人保健施設入居高齢者13名（平均年齢86.5±10.5）である。脳波データを、大脳活性の測定指標とした。認知症の対象者では、温湯使用で脳波の活性化が認められた。また、身体的な介護度の高い高齢者においても、熱湯を用いた刺激において、有意な脳活性が認められた。 結果から、認知症のある高齢者と介護を要する高齢者では、熱湯を使用した手洗いが効果的であることが示唆された。
54.脳波を用いた介護老人保健施設入居者における大脳を活性化させるための手洗い援助の基礎的検証	単	2012年07月	第38回日本看護研究学会学術集会、沖縄（沖縄）	介護福祉施設入居者を対象とし、温湯と熱布の手指刺激による大脳の活性化が異なるかどうか検証を行い、食前に覚醒度を上げるための高齢者の手洗い援助ケアについて示唆を得ることを目的とした。対象者介護老人保健施設入居者13名（平均年齢86.5±10.5歳）である。測定指標には、脳波を用いた。温湯使用では、全ての測定部位において、温熱刺激時で大脳の活性化が認められた。熱布使用では、大脳の有意な活性化は認められなかった。温湯と熱布では大脳の活性化が異なることが示されたことから、生体を活性化させる高齢者の食事前の手洗いとしては、熱布よりも温湯を使用することが望ましいことが示された。
55.Verification of hot cloth use as hand washing before meal by difference posture between supine position and sitting position that uses an electroencephalogram.　（脳波を用いた仰臥位と坐位での姿勢の違いによる食事前の手洗い援助としての 熱布使用の検証）	共	2011年10月	The 3rd Korea-Chine-Japan Nursing Conference, Korea（韓国）	仰臥位と坐位の姿勢の違いによって、熱布を用いた手指刺激による生体の活性化が異なるかどうか検証を行うことを目的とした。その結果、食事前に大脳を活性化させるという点から手洗いの援助を考えると、熱布使用の場合は仰臥位よりも坐位姿勢となるよう援助を行うことが望ましいことが示唆された。 徳重あつ子、山本美輪、田中小百合、松川泰子、小石真子

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
56.The Effects of Colored Tablecloth on Autonomic Nervous System and Subjective Arousal: The Possibility of Using a Color Effect for Nursing.（カラーテーブルクロスが自律神経系と主観的覚醒度に与える効果：看護における色彩効果活用の可能性について）	共	2011年07月	World Academy of Nursing Science, 2nd International Nursing Research Conference, Cancun（メキシコ）	本研究における研究目的は、家庭環境内に取り入れた色彩が、自律神経活動と主観的覚醒度に与える影響について基礎的な検証を行うことである。その結果、テーブルクロスのような簡易なもので、覚醒度を上げたり、リラックス効果を得たりすることが可能であることが示されたため、看護での活用も可能なことが明らかとなった。 Atsuko Tokushige, Miwa Yamamoto, Sayuri Tanaka
57.熱布と温湯の比較による大脳を活性化させる看護技術としての手浴―脳波と唾液アミラーゼの分析から―	単	2010年12月	第30回日本看護科学学会学術集会, 札幌,講演集p.528 （札幌）	手指への刺激が大脳を活性化させるかどうか、また熱布と温湯の手指刺激方法の違いによって、生体の活性化に及ぼす影響が異なるかどうかについて、健康な成人で基礎的な検証を行うことを目的とした。その結果、快適さの観点からみると、熱布使用よりも温湯使用の方が望ましいと考えられた。
58.The effects of color stimulus on autonomic nervous system activity and subjective awareness（テーブルクロスの色彩の違いが自律神経活動と主観的覚醒度に与える影響の検証）	共	2010年11月	第2回日中韓看護学会、東京、抄録集pp.200-201 （東京）	研究目的は、家庭環境内に取り入れた色彩が、自律神経活動と主観的覚醒度に与える影響について基礎的な検証を行うことである。その結果、自律神経活動評価指標データからは、有意差が認められた黒がインパクトの強い色彩であることが示されたが、主観調査では黄が最も覚醒度が高いという結果であった。この理由としては、今回用いた有彩色の中では、黄が最も明度が高く、鮮やかに見えた可能性があることと、目覚めという感覚にマッチしていたことが考えられた。このことより、食事やレクリエーション前のセッティングとして、自律神経活動を活性化させるために色彩刺激の活用の可能性があると考える。 徳重あつ子、山本美輪、田中小百合、植村小夜子、桝本妙子
59.Verification of seated posture assist to activate the brain of older persons in a welfare institution by analyzing electroencephalogram （脳波の分析による福祉施設入居高齢者における大脳を活性化させる坐位姿勢援助の検証）	共	2009年09月	第1回日中韓看護学会、北京、抄録集p.223-225 （北京）	仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を脳波のパワースペクトルを用いて分析し、大脳を活性化させる坐位姿勢援助について検証を行った。その結果、椅子坐位のみに有意な脳活性が認められたことにより、大脳を活性化させる坐位姿勢援助としては、ベッド上坐位よりも椅子坐位の方が望ましいことが示された。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵
60.施設入居高齢者における仰臥位からの座位への姿勢変化がもたらす脳活動	共	2008年12月	第28回日本看護科学学会学術集会、福岡、講演集p.186 （福岡）	仰臥位から座位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を脳波を用いて分析し、大脳を活性化するケアとしての座位姿勢援助の有効性について検証を行った。施設に入居している高齢者においては、ベッド上での座位姿勢で大脳の活発化を促すことは困難であることが今回の研究により明らかになった。大脳を活性化させる準備姿勢として高齢者に座位姿勢を促す際には、可能な限り椅子や車椅子への移乗援助を行うことが望ましいと考えられる。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵
61.仰臥位から坐位への姿勢変化がもたらす	共	2008年09月	生体医工学シンポジウム2008、大	脳波を用いて仰臥位から坐位に姿勢を変化させた時の大脳の活性化を検証した。脳波パワー値はヘッドアップ80度では仰臥位よりも坐

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
脳活性への有効性についての研究			阪、抄録集CD－ROM（大阪）	位での値が有意に高かったが、30度では有意差は部分的であった。角度比較では、80度の値が30度よりも有意に高く、脳活性の持続時間は80度の方が長かった。主観調査では、仰臥位よりも坐位、30度よりも80度での覚醒度が高いとの回答が多かった。仰臥位から坐位への姿勢変化は大脳を活発化させ、その効果はベッドの挙上角度によって異なることが示唆された。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵
62.健康な高齢者におけるベッド上坐位姿勢の角度の違いによる自律神経活動の比較	共	2007年03月	日本人間工学会第15回システム大会、東京、抄録集CD－ROM（東京）	高齢者においては、自律神経活動の低下が指摘されており、ケアの安全性の検証は重要である。本研究では、健康な高齢者において仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の自律神経活動を評価し、生体に与える影響の検討を行った。HR、％LF、HFの変化は緩徐であり、外的刺激の認識も鈍化しており、日常生活に問題のない高齢者においても、加齢による機能低下の存在が推測された。このことから、機能維持のための積極的な働きかけの必要性が示唆された。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、木下慈子
63.健康若年者におけるベッド上での坐位への姿勢変化がもたらす脳活動 －脳波、大脳局所Hb、心電図分析より－	共	2006年12月	第26回日本看護科学学会学術集会、神戸、講演集p.349（神戸）	ベッド上で仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態を生理学的な指標を用いて分析し、大脳を活性化するケアとしての坐位姿勢援助の有効性について基礎的な検証を行った。受動的なベッド上坐位姿勢での大脳と交感神経活動の活発化を確認することができたため、坐位姿勢には生体を活性化させる作用があると考えられる。これを看護の観点からみると、ケア効果を高めるための使用可能性が示唆された。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、片山恵、岡みゆき、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子
64.仰臥位から坐位への姿勢変化が生体に及ぼす影響 －自律神経活動指標と左前頭葉局所Hb値の検討から－	共	2006年03月	日本人間工学会第14回システム大会、東京、抄録集CD－ROM（東京）	仰臥位からベッド上での坐位へ姿勢を変化させた時の大脳の活動状態の検証を、脳波と近赤外線装置を用いて行った。比較したヘッドアップ角度は80度と30度で、脳波、大脳局所Hb共に角度によって異なる変動をみせた。ヘッドアップ角度が80度の方が30度よりも活性化を示し、重力による影響が考えられた。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子
65.坐位姿勢の脳活性への有効性に関する基礎的研究 －前頭葉の脳波分析から－	共	2005年10月	第26回バイオメカニズム学術講演会、栃木、抄録集pp.143-144（栃木）	廃用性脳機能低下の予防的アプローチは、高齢社会における看護の視点として重要である。脳への働きかけを行う看護の基本ケアとして坐位姿勢援助を位置付ける為の基礎的な検討を行うことを目的とした。特に、今回は坐位姿勢の中でもベッドのギャッチアップによる坐位姿勢に着目した。仰臥位からギャッチアップ坐位への体位の変化による大脳の活性を、前頭葉の脳波の解析によりとらえることができた。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜季、岡みゆき、片山恵、矢野祐美子
66.脳波からみた坐位姿勢への有効性の基礎的研究 －パイロット・スタディー－	共	2005年09月	第13回看護人間工学部会総会・研究発表会、京都（京都）	坐位姿勢の第一歩であるギャッチアップによる坐位に着目し、仰臥位から坐位への姿勢変化による脳活性を脳波でとらえることを試みた。結果、仰臥位から坐位へ姿勢を変化させた時の脳活動の活性化を脳波でとらえることができた。看護ケアにおける坐位姿勢援助の重要性を検証することを目的とした基礎的研究のパイロットスタディとして本研究を位置付け、分析手法等の土台とした。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜季、岡みゆき、片山恵、高田幸恵、前田知穂、矢野祐美子
67.寝床内気候からみたエアマットレス使用時の体位変換時間の検討	共	2005年05月	第1回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会、大阪、日本褥瘡学会誌、6(4)、p.667	エアマットレス上に2時間安静臥床した時の寝床内気候と身体圧迫部位の皮膚温を測定し、適切な体位変換時間の検討を行った。体位変換については、2時間で89.5％という仙骨部の多湿状態が確認されたため、エアマットレスを用いる際には、2時間以内に行うことが望ましいと考えられた。また、どんなに有効な褥瘡予防具が開発されて

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
68.エアマットレス使用時の寝床内気候についての検討	共	2004年09月	（大阪） 第12回看護人間工学部会総会・研究発表会、東京、抄録集p.12 （東京）	も、用具を吟味して使いこなして適切なケアを計画することは、看護を実践する者に必要な視点であることが確認出来た。 徳重あつ子、阿曽洋子、矢野祐美子、伊部亜希、松村敦代 2時間の安静臥床条件でエアマットレスを使用した時の寝床内気候と身体圧迫部位の皮膚温を測定し、適切な寝床内気候について検討を行った。寝床温度、寝床湿度、仙骨部皮膚温、肩甲骨皮膚温、不快指数のデータは、快適とはいえないという結果であった。これらはエアマットレスの疎水性素材と関連があると考えられた。更に実験に用いたエアマットレスは静止型であり、セルの膨縮がなく常に背部と接していたことも原因の1つと考えられた。 徳重あつ子、阿曽洋子、矢野祐美子、伊部亜希、松村敦代
３．総説				
1.高齢者の寝たきり予防のための看護ケア　座位姿勢を援助することについて改めて考える	単	2022年5月	臨床老年看護、29（3）、pp. 46-51	高齢者の寝たきり予防、特に座位姿勢の重要性について解説を試みた。
2.Mariah　Snyder博士に学ぶ看護における補完代替療法2　《依頼原稿》	共	2010年03月	看護実践の科学、35(4)、pp.60-65、看護の科学社	平成21年9月に明治国際医療大学看護学部の教育講演会に招聘したMariah　Snyder博士の講演内容を基に、日本において補完代替療法を実施する際の課題について述べた。 本人担当部分：Snyder博士が指摘した課題について、日本における解決方法について考察を行った。（担当頁特定不可能） 共著者名：徳重あつ子、五十嵐稔子、西山ゆかり、田口豊恵、小山敦代、浅野敏朗、種池禮子
3.Mariah　Snyder博士に学ぶ看護における補完代替療法1　《依頼原稿》	共	2010年02月	看護実践の科学、35(3)、pp.46-50、看護の科学社	平成21年9月に明治国際医療大学看護学部の教育講演会に招聘したMariah　Snyder博士の講演内容を基に、補完代替療法の歴史や日本の状況について述べた。 本人担当部分：世界における補完代替療法の歴史について担当した。（担当頁特定不可能） 共著者名：五十嵐稔子、徳重あつ子、田口豊恵、西山ゆかり、小山敦代、浅野敏朗、種池禮子
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.教育講演　気軽に実験しませんかpart③「看護技術における実験研究のひろがり」看護職者が行う実験研究とは	単	2022年9月23日	第４回看護人間工学会学術集会（大阪）	教育講演として、気軽に実験しませんかpart③「看護技術における実験研究のひろがり」を徳重あつ子（武庫川女子大学）、能登裕子（九州大学）、伊部亜希（敦賀市立看護大学）、水戸優子（神奈川県立保健福祉大学）、野呂影勇（早稲田大学・エルゴシーティング）の4名で行った。そのうち、「看護職者が行う実験研究とは」について担当した。
2.看護分野の現状から考えるwithコロナ時代における実験研究	単	2022年3月	看護人間工学会誌、3、pp12-13	
3.研究室紹介	単	2020年5月	バイオメカニズム学会誌、44（２）、p. 107	
4.素晴らしきかな、マイノリティ、一バイオメカニズム学会における看護系研究の魅力と研究者の存在意義	単	2019年11月	バイオメカニズム学会誌、43（4）、p. 215	
６．研究費の取得状況				
1.介護老人福祉施設に	共	2023年4月～	科学研究費補助金	研究分担者

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
おける背面開放座位介入時の自律神経活動と皮膚血流量の検証		2027年3月	（基盤研究C） 23K10278	研究代表者：岩﨑幸恵 研究分担者：徳重あつ子、片山恵、伊部亜希、林愛乃 協力：広岡繁生
2.手指巧緻性と成功失敗要因から検証する高齢者に適した点眼支援	共	2023年4月～2026年3月	科学研究費補助金（基盤研究C） 23K10363	研究分担者 研究代表者：工藤大祐 研究分担者：徳重あつ子、片山恵、岩﨑幸恵、野呂影勇
3.看護師のInvolvementとCompassionの関連性とストレスコーピング	共	2022年4月1日～2025年3月	科学研究費補助金（基盤研究Ｃ） 22K10772	研究分担者 研究代表者：片山 恵 研究分担者：松澤洋子、徳重あつ子、川原 恵 、福森崇貴、谷津裕子
4.女性看護師における手の冷たさのメカニズム解明と交感神経活動に着目した改善策の開発	共	2021年4月1日～2025年3月	科学研究費補助金（基盤研究C） 21K10650	研究分担者 研究代表者：鈴木 みゆき（岡みゆき） 研究分担者：鷹股 亮、土田 敏恵、徳重あつ子、伊部 亜希
5.高齢血液透析患者の意思決定に関わる看護師の倫理的問題と関連要因	共	2020年4月	一般社団法人日本腎不全看護学会	研究代表者：武田(山中)晶子 共同分担者：徳重あつ子、杉浦圭子、山本久代、小柴隆史
6.認知症高齢者における大脳の機能維持を目的とした手洗いの検証	共	2019年4月	科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）	研究代表者 分担：片山恵、横島啓子、杉浦圭子、鈴木みゆき、久保孝富、片山修 連携：岩﨑幸恵、桧山美恵子
7.回想を促し大脳を活性化させる認知症高齢者との会話の検討	単	2017年	武庫川女子大学 科学研究費学内奨励金	回想を促す会話が認知症高齢者の大脳を活性化させるかどうか検証を行い、看護介入としての回想法の実施方法の検討を行うことを目的として研究を行った。
8.Basic Research of Reminiscence Therapy in Nursing Measured by Near Infrared Spectroscopy (NIRS)	単	2016年	日本私立看護系大学協会（国際学会発表助成）	Sigma Theta Tau International (STTI) Honor Society of Nursing's 27th International Nursing Research Congress, CAPE TOWN 上記学会での発表について助成を受けた。
9.脳波と光イメージング脳機能測定による看護における回想法の検証	共	2012年04月～2018年3月	科学研究費補助金（基盤研究C） 24593544	研究代表者 本研究では、認知症の高齢者に対して個人回想法を用いた介入を実施し、脳波と光イメージング脳機能測定装置を用いた評価を行い、認知症を改善する看護ケアとして回想法の活用が可能かどうか検証を行うことを目的として行った。
10.脳波による座位姿勢と組み合わせた誤嚥の危険性を低減させる食前の手指清潔ケアの検証	単	2009年04月～2011年3月	科学研究費補助金　若手研究（スタートアップ） 21890282	研究代表者 寝たきりの高齢者や認知症のある高齢者においては、食事摂取時に大脳の覚醒状態が十分でないと誤嚥の可能性がある。その点から、食事前には覚醒度を上げる看護ケアが必要であると考える。そこで、本研究においては、食前の手洗いの実施方法の違いが大脳の活性化に及ぼす影響が異なるかどうか検証を行うこととした。
11.色彩が自律神経活動ならびに主観的覚醒度に及ぼす影響についての基礎的研究	単	2009年	明治国際大学学内公募研究	研究代表者 色彩が人体に与える影響について、自律神経活動と主観的覚醒度のふたつの側面について基礎的な検証を行った。
12.新任期保健師の活動計画立案と評価能力育成プログラムの開発	共	2008年4月～2010年3月	科学研究費補助金 （基盤研究Ｃ） 20592644	研究分担者 新任期の保健師が保健活動に不可欠な企画立案と評価能力を身に付けられるよう教育プログラムを作成し、その有効性について評価を

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
13.健康高齢者における大脳と自律神経活動からみた座位姿勢の有効性の検証－機能低下予防のための看護ケアアプローチとして－	共	2006年08月～2007年3月	フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団 第17回研究助成	行った。 研究代表者：桝本妙子（2008）、植村小夜子（2009-2010） 堀井節子、三橋美和、田中小百合、徳重あつ子、榊原恵、大籠広恵、福本惠 研究代表者 仰臥位からギャッチベッド上での座位へ姿勢を変化させた時の大脳と自律神経の活動を検討し、座位姿勢援助の有効性について、基礎的な 検証を行うことを目的として研究を行った。 徳重あつ子、阿曽洋子、伊部亜希、岡みゆき、片山恵、宮嶋正子、木下慈子

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2020年	尼崎市中央市民大学教養講座　講師　アクティブエイジング講座～人生100年時代のためのリスク回避の知識～
2.2020年	第41回バイオメカニズム学術講演会　座長
3.2020年	第２回看護人間工学会学術集会　座長
4.2019年9月5日	人生100年時代の「フレイル」について　さくらFM健康番組 《西宮市・西宮医療連盟提供》 心と身体の健康相談
5.2019年4月	看護人間工学会　理事
6.2019年	日本看護研究学会第45回学術集会　実行委員
7.2019年	第16回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会　実行委員
8.2019年	尼崎市中央市民大学教養講座　講師　アクティブエイジング講座　「人生100年時代を元気に過ごすために」
9.2018年10月27日	第26回看護人間工学部会総会・研究発表会　大会長
10.2018年04月01日～現在に至る	バイオメカニズム学会理事
11.2018年03月17日	日本看護研究学会第31回近畿・北陸地方会学術集会　実行委員
12.2017年11月11日	第25回看護人間工学部会総会・研究発表会　実行委員
13.2017年06月11日	第19回日本母性看護学会学術集会　協力委員
14.2016年09月03日	第15回日本アディクション看護学会　実行協力員
15.2016年04月01日～現在に至る	学部「まちの保健室」事業　プロジェクトメンバー
16.2014年08月23日	第40回日本看護研究学会学術集会　実行委員
17.2014年	第22回看護人間工学部会総会・研究発表会　事務局
18.2012年09月01日～現在に至る	日本人間工学会看護人間工学部会　看護人間工学研究誌編集委員
19.2012年05月01日～2018年3月31日	バイオメカニズム学会　評議員
20.所属学会	日本看護科学学会、日本看護研究学会、日本老年看護学会、日本老年医学会、日本人間工学会、日本褥瘡学会、日本生体医工学会、日本健康医学会、バイオメカニズム学会、日本統合医療学会、日本環境感染学会、看護教育学教育学会、日本人間工学会看護人間工学部会、日本褥瘡学会近畿地方会、日本地域看護学会、日本公衆衛生学会、看護質的統合法（KJ法）研究会、GAPNA（Gerontological Advanced Practice Nurses Association）、IPA(International Psychogeriatric Association）、STTI（Sigma Theta Tau International）